
流星のロックマン ～共に歩む道～

おりんぼす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン ～共に歩む道～

【Nコード】

N77920

【作者名】

おりんぼす

【あらすじ】

メテオGの事件から一ヶ月・・・

世界の英雄と国民的アイドルのその後の日常を描く物語

第1話 衝撃（前書き）

初めまして おりんぼす です

ゆくゆくはオリジナル小説を書きたいので
その礎になる作品を描きたいと思っています

第1話 衝撃

「それでは、これより記者会見を始めたいと思います」

そこには、サテラポリスである長官と暁シドウ、そして星河大吾の姿があつた

淡々と記者からの質問に対応していく中

一人の記者が質問をした、いや一人ではない　ここにいる全ての記者が待ち望んでいたであろう質問だ

「ロックマンの正体は誰なんですか？」

・・・静まり返った中、大吾は答えた

「私の息子である、　星河スバルです。」

波紋は徐々に広がり、その場の雰囲気は一変

「ここから先は、私から説明させて頂きます」

暁はそう言つとメテオGの事件だけではなく

今までに起きた2度の地球の危機の詳細についても説明していった

無論、この記者会見は生放送である

リアルタイムで放送されていく事実に入々は固唾を飲んで聞きいつ

ていた

くコダマタウンく

一人の少年はこの放送を見て、頭をかかえていた

平穏が音をたてて崩れ去る

「はあ・・・どうしよう・・・」

『いいじゃねーか、別によ』

ウィザードオンしたウィザードはそう言う

「笑い事じゃないよ、ロック・・・」

少年こと星河スバルは、相棒であり親友であるウィザード、ウォーロックに笑われていた

『お前は、地球を3度救ったんだぞ？そんなに塞ぎ込むことじゃないだろう』

「うっ・・・もう僕学校行けないよ・・・」

そう呟くと、二階へと上がって行った

星河スバルは、通称ロックマンこと地球を3度救った英雄である。

スバルの母であるあかねもまた、そんなスバルを見て気に病んでいた

「ロック君 スバルの事お願いね？ それに今日はアレだから・
ね？」

『任せろ オフクロ スバルは、なんとかしとく、それよりあいつ
らは何時来るんだ？』

「多分、夕方になると思うんだけど・・まずはスバルをどうにかし
ないとね」

ピンポン

「星河スバル君はご在宅でしょうか？」

大勢の記者がスバルの家に押し寄せ、我先にとインターホンへ質問
を飛びかわす

「あらら・・じゃあ、ロック君 スバルのことお願いね」

あかねは、玄関へと向かいスバルは出かけていると対応していた

『さて・・・』

ウォーロックは二階のスバルの部屋へと向かった

『スバル〜 元気出せ〜』

部屋に入りながら声をかけスバルへと近づく

「ロック・・・ 僕 どうしたらいいんだろう?」

スバルは、呟く

『どうするもこうするも、今まで通りでいいだろ！お前はお前だ』

「でも・・・」

『でもはなしだ！ あの女だって、お前と同じ立場なんだぞ？ 少しは見習え』

「ミ ミソラちゃんは、国民的アイドルだよ？ 僕なんかと全然違うよ」

スバルは、顔を赤らめながら反論する

『何が違うだ 世界を3度救った英雄と国民的アイドルに大差なんざないだろーが!』

「と とにかく違うったら違うの!」

スバルは、そう言つとベットに入った

無論、寝るためではなく逃げるためだ

何度も言うが、スバルは、地球を3度も救った英雄ロックマンである

『まったく 往生際が悪いぜ』

ウォーロックは、ウィザードオフしてハンターへと戻っていった

第2話 家族

いつの間に眠っていたのか、スバルは目を覚ました

なんだか、リビングが騒がしい、スバルは時間を確認してから下へと降りて行った

「あ スバル君！ おはよう！」

茜色の髪 エメラルドグリーン瞳 ピンクの服装の女の子は、とびっきりの笑顔を見せる

「おはよう… ん？ ミミ ミソラちゃん?!?!?」

スバルの目の前には国民的アイドルであり初めてのブラザーである響ミソラがいた。

「ふふ、 スバル君！ 今日からお世話になります！」

ミソラは、スバルに頭を下げる

「え？ か 母さんどういうこと？」

スバルは現状を理解できずあかねに解答を求める

「ふふ、あかねスバル 実は今日からミソラちゃんがうちに居候することになったのよ」

あかねは笑いながら答える

「い 居候？ 僕知らないよ！」

「そりやそうよ、今初めて言っただから」

あかねは意地悪く笑ってみせる

「スバル君、私がいたらやっぱり ダメかな？」

ミソラは不安げにスバルの顔を見つめる

「い 嫌じゃないよ！ 大歓迎だよ だって家族が増えるし、ミソラちゃんは僕が一番大切な人だから！」

スバルはミソラを見つめ返し即座に答える

「え、す スバル君 それって… / /」

ミソラは顔を赤らめる

スバルは自分で言った事を思い出した（ミソラちゃんが一番大切な人だから！）

どんだん顔を真っ赤にするスバル

「あ いや その… / /」

「スバル君 私ね スバル君のお母さんとお父さんにスバル君の家で一緒に暮らさないか？」

って言われた時

とっても嬉しかったの　だって私の…一番大切な人と一緒に居れるんだもん／＼」

ミソラは耳まで赤く染めながらスバルに自分の気持ちを伝えた

「私　星河スバル君のことが好きです　付き合ってください／＼」

ミソラは赤くなった顔を隠すように頭を下げた

「ミソラちゃん　顔を上げて？」

スバルも顔が赤かったが真剣な表情でミソラを見つめる

「僕もミソラちゃんのことを好きです　僕でよかったらお願いします／＼」

ミソラは目に涙を溜めながらスバルに抱きついた

「ありがとう　スバル君／＼」

「こちらこそ、よろしくね　ミソラちゃん」

「うん！　よろしく　スバル君」

二人は互いに顔を赤らめ抱き合っていた

「いいものみせてもらったわ」

刹那 空気が凍り 二人は固まる

ここはリビングだ、あかねは全てを目の前で見っていたのだ

「ふふ、よかったわね スバル ミソラちゃん」

そう言うとかかねはニヤニヤしながら台所へと向かった

「今日はご馳走にしないとね」

スバルはミソラから離れようとするがミソラはスバルの腕に抱き付いていた

『ポロン、よかったわね ミソラ』

いつの間にか現れたミソラのウィザードであるFM星人ハーブが言った

隣にはぐったりとしたウォーロックを連れて

「うん！」

ミソラは笑顔で答える

「あれ、 ロック どこに行ってたと思ったたらハーブと一緒にだったんだ」

スバルはぐったりとしたウォーロックに声をかけるが

・・・返事がないただの屍のようだ

『スバル君 ごめんなさいね KY星人は私が拉致してたわ』

屍のかわりにハーブはスバルに答える

「KY星人って…」

『それより、スバル君 ミソラをよろしくね』

ハーブは話題を変えた

「あ、うん！ ミソラちゃんはずっと僕が守るよ」

スバルははっきりと答え 自分の腕に抱き付いているミソラを見る

「ありがとう スバル君！」

ミソラは幸せそうな顔だった

「ただいま」

大吾が仕事から帰ってきた

普段より帰ってくるのが早い

「「「おかえり（なさい）」」」

「あゝ 疲れた お、ミソラちゃん いらっしゃい」

「あ、今日からお世話になります！」

ミソラは大吾に挨拶をした

「もう、家族なんだから、自分の家だと思って生活していいからな」

大吾はミソラにそう告げる暖かい口調
泣き始めた
ミソラは目に涙を溜め

「うう グス…」

あかねはそうつとミソラを抱きしめ

「今までよく一人で頑張ってきたわね、これから私や大吾さんスバルやロック君だって居るのよ？」

たくさん甘えなさい」

あかねはミソラの頭を撫ぜた

「それから、これからは、私や大吾さんのことをお母さん、お父さんと呼ぶ事 わかった？」

「グス… はい、お お母さん」

もう言えない事だと思っていた、最愛のママはもういないのだから

それなのに私を家族と思って接してくれる

そんな星河家の優しさにふれたミソラは、涙が止まらなかった
泣き終るまであかねはミソラを抱きしめていた

「さ、ご飯にしましょう?。」

家族4人でご飯を食べるその風景は、本当の親子のようにしか見えなかった

無論、あかねによつて、先ほどあつた告白は大吾へとバラされ

スバルとミソラは顔を真つ赤にしながらご飯を食べていた

あかねと大吾は終始ニヤニヤしていたのは言うまでもない

「「「ごちそうさまでした」「」」

「お粗末さまでした」

スバルは逃げるように部屋へと向かった

(恥ずかしくて顔上げれないよ…)

ミソラは顔を伏せていた

「ミソラ スバルのことよろしく頼むな

今日あつたこと(記者会見)でスバルの生活は一変すると思う ス

バルを支えてやってくれ」

大吾は真剣な表情でミソラに言った

「は はい！」

大吾は穏やかな笑みを作りミソラの頭を撫ぜた

「スバルは幸せものだな」

ミソラは大吾の暖かい大きな手に懐かしさを感じた

「ところでミソラ は部屋どうする？ 一応空き部屋は作っておいたが・・・」

「スバル君の部屋で！」

即答

「ははは、そういうと思ったよ さ、スバルの元に行ってあげな」

大吾とあかねは笑ってミソラが二階へと上がって行くのを見ていた

第3話　お願い

スバルは耐え切れず、自分の部屋へと逃げ込んだ

「母さん・・・　ホント勘弁してよ・・・」

全てを暴露するあかねに頭をかかえていた

ふと目に入った物体

燃え尽きたかのように真っ白なウォーロックがいた。　否、漂っていた

「あ、ロック　どうしたの？」

「スバル・・・　俺は　愛　がわからねえ・・・」

延々とウォーロックはハープに愛について説教を受けていたのだから？

燃え尽きていた

「はは・・・　ロック、今日はもう休んだら？」

「ああ、　そうするぜ・・・」

ウォーロックはウィザードオフをしてスリープモードへとはいった

「あのロックがあそこまで・・・ハープは何をしたんだ・・・？」

考えるのも恐ろしい…

コンコン

「スバル君、入ってもいいかな？」

ミソラはスバルの部屋の前まできてスバルに聞いた

「あ、うん 入っていいよ」

「失礼しまーす うわ、本がいっぱい有るんだね」

「うん、宇宙関連の本しかないけどね、それに、ミソラちゃんもう家族なんだから

失礼しますとか いらないよ」

笑ってミソラに言う

「でもね、自分の好きな人の部屋に入るのって勇気があるんだよ？」
そう言うとスバルに抱きつく

「わ、 ミ ミソラちゃん／＼」

部屋に入るのは抵抗があるのに 抱き付くのは別なのか

「えへへ、いいでしょ 別に／＼」

スバルは心臓が早くなる

「そういえば、スバル君はいつから学校かな？」

「あ、学校はね」

スバルはミソラに説明していく

コダマ小学校は今長めの春休みにはいつている

スバルは学校側から二学期 つまり夏休みが終わってから学校にきなさい と言われている

つまりスバルは半年間の休学ということになる

これは大吾やあかね、サテラポリスで決めた事らしい

いかに地球を救った英雄であれ、色々と時間が必要だということだろう

「ふーん、スバル君、半年も休みがあるんだ」

ミソラは何かを思いついたらしく

スバルから離れ 面と向かって

「スバル君、明日オクダマスタジオに行こう！」

「え、あ、うん、　いいよ　なんか用事？」

「うん、　ちょっとね」

ミソラはニコニコしながら

「お風呂行って来るね」

下へと降りて行った

「なんだろう？　　なんかミソラちゃん企んでる気がする・・・」

スバルのこの予想は明日的中する事になる

「お父さん、お母さん」

ミソラはリビングで大吾とあかねに　明日の計画について話していた

「・・・って感じなんだけど、ダメかな・・・？」

ミソラは不安げに大吾とあかねを見つめる

「ふふ、おもしろそうね」

「スバルもこれで少しは度胸が付くといいな」

大吾やあかねは賛成のようだった

「でも、いいのか？ ミソラ？」

「うん！ スバル君じゃないとヤダもん」

ミソラは嬉しそうに言うと

「よし、お風呂に行ってきます」

ミソラは風呂場へ向かった

その後、スバルも風呂に入りリビングで話して居るミソラの元へ向かった

「ねえ、ミソラちゃんってどこで寝るの？」

「スバル君の部屋だよ？」

「えええ、さ さすがにそれは不味いんじゃない？」

スバルは言葉に詰まる

「いいじゃん、もう恋人なんだしさ／＼」

ミソラは顔を赤らめる

「う、確かにそうだけど・・・」

「スバル君、私と同じ部屋嫌なの？」

ミソラは（泣いたふり）しながらスバルに聞く

「え、いや そんなことないよ！」

「じゃ、部屋に行こう？」

ミソラは笑顔でスバルの部屋に向かった

(え、泣いてたんじゃ・・・)

スバルも渋々ついていく

「父さん、母さん おやすみ」

「「おやすみ」「」

「スバル ミソラに変な事しちゃダメよ？」

「し しないよ そんなこと！」

スバルは顔を真っ赤にしながら反論し 自分の部屋へと向かった

長い夜がやってくる・・・

第4話 ずっと・・・

「遅いよ、スバル君」

ミソラは頬を膨らまして怒る

（か 可愛い・・・／／）

スバルは見惚れるいる

「スバル君？」

「っは、 な 何ミソラちゃん？」

スバルは慌ててミソラの視線から目を外す

「あのさ…スバル君、今日スバル君と一緒に寝ていい？」

爆弾発言

「だ ダメでしょ、それはダメ！」

「お願い！」

ミソラはスバルを見つめる

「う… 今日だけね？」

スバルは渋々と了承する

「ありがとう」

ベットに入るとミソラはスバルの腕に抱きついた

「ミ ミソラちゃん 緊張して寝れないよ・・・」

「だって、こうやって寝た方が安心するんだもん」

スバルの腕に顔を埋めながら

ミソラは寝息をたてて寝始めた

スー・・・スー・・・

規則的なリズムを刻みながら

スバルは今ミソラに腕を掴まれている為、ミソラと向き合っている状態だ

（やばい・・・可愛すぎる／＼）

スバルは中々寝つけなかった

みんな寝静まった中

スバルは何かに呼ばれたかのように目を覚ました

ハンターで時間を確認する、午前4時だ　外は白みがかっている

何か聞こえる、スバルは声の出所を探す

「行かないで・・・スバル君・・・ママ・・・」

哀しそうに呟く声の主はミソラだった、頬には涙が伝った後がある

「行かないで・・・スバル君　独りにしないで・・・」

スバルはミソラの孤独を知っていたつもりであった

両親を亡くし、ただ独りでがむしゃらに頑張ってきた少女がここにいる

スバルはそっとミソラを抱き寄せ、優しく抱きしめる

「僕はどこにも行かないよ　ずっと君の傍にいるよ」

スバルはミソラを抱きしめたまま呟くとミソラは穏やかな表情になり、スバルもまた眠りについた

僕はずっと君の傍に居るよ、ずっと　ずっとね

声にならない言葉を胸に秘めながら

第5話 幸せ

「スバル〜 ミソラ〜 いつまで寝てるの 起きなさい〜」

時刻は8時30分

あかねは二階のスバルの部屋へと向かう

「あらあら、二人とも朝からラブラブね」

あかねの目の前には

同じベットで抱き合ったスバルと幸せそうな顔をしたミソラ

「ふふ、ミソラったら幸せそうね」

『ポロン、おはようございます あかねさん』

ハープがウィザードオンをして挨拶をしてきた

「おはよう、ハープちゃん」

ハープもまた幸せそうなミソラの顔を見て微笑んでいた

「何があったのかしらね〜」

あかねは楽しそうに二人を眺める

『実は・・・』

ハーブは朝あった事をあかねに話した

ハーブは時々ミソラがうなされていることを知っていた

もちろん、朝方ミソラがうなされているのに気づき、起きていたのである

「ふーん、スバルもやるわね」

『ええ、びっくりしました でも幸せそう』

「ふふ、もう少し 寝かせておきましょうか」

あかねはそう言うのとハーブと共に下へと降りて行った

「うーん・・・」

ミソラは少し苦しさを感じながら目をあけた

「!?!」

スバルが目の前にいる、しかも自分を抱きしめてくれているのだ

（す スバル君に抱きしめられてる!ど どうしよう）

自分から抱き付いているならともかく、スバルが抱きしめてくれて

いるのだ

早まる心臓の音がやけに聞こえてくる

ミソラは考える事やめる

今はただ この幸せが長く続けばいい それだけでいい

ミソラは目を閉じ自分の唇をスバルの唇へと近づけた

パチッ

スバルの目が開く、目の前にあるのはミソラの顔

スバルは状況が読み込めない

口を開こうにミソラの唇によって塞がれている

数秒後

ミソラはそうつと目をあける

「!?!」

スバルと視線が合う

ミソラは慌ててスバルから離れる

「ミ ミソラちゃん い 今のは…」

「私のファーストキス　ごめん…　嫌だったかな…」

ミソラは俯く、声には元気がない

スバルはミソラを抱きよせる

ミソラは一瞬ビクついたがスバルに身を委ねた

「嫌じゃないよ、ちよつとびっくりしただけよ」

ミソラはまだ元気がない、スバルはミソラを自分に向けさせると、すかさずキスをした

「えへへ、　仕返しだよ」

スバルは顔を赤らめながらミソラに言う

「スバル君　ずるい」

赤くなったミソラはスバルの胸に自分の顔をうずめる

スバルはミソラが元気になったのを確認すると

「さ、起きようか？　ミソラちゃん」

「うん」

スバルとミソラはリビングへと降りて行った

「「おはよう」」

「「おはよう」」

大吾とあかねはニヤついている

無論、あかねは大吾についさつきあった出来事を話している

スバルとミソラは顔を真っ赤にしながら 朝食を食べた

「さ、そろそろ行こうか ミソラちゃん？」

「うん！」

準備を終えた二人は、大吾とあかねに一言告げ、オクダマスタジオへと向かった

ウェーブライナーの中で、ミソラがスバルの腕に抱き付いていたので

視線が痛かった のは言うまでもない

第5話 幸せ（後書き）

一気に5話upしました。

感想 よかったらお願いします

第6話 企みの真相（前書き）

ウォーロックがまったく登場していません
忘れていたという訳ではありませんよ！

第6話 企みの真相

「あ、 ミソラ！」

ミソラに気付きスズカが手を振ってやってきた

「スズカ！ 久しぶり〜 元気？」

他愛もないガールストーク、スバルは疎外感が半端ではなかった

20〜30分経ったのだろうか

スズカはスバルにやっと気づく

「あれ、スバル君だ！ どうしたの今日は？」

「ミソラちゃんの用事を済ませにかな？」

若干いじめていたスバル

「用事？ あ、ミソラ もしかして、スバル君をドラマの相手役に
する気じゃないよね」

「うん そのつもり〜」

「はい？」

スバルは意味を理解できない

ドラマの相手役？なんだそれは

「スバル君、私に付いて来て」

ミソラとスズカに連れられて、オクダマスタジオの中へと入っていく
監督と思われるウィザードとミソラは話しをしている

「ねえ スバル君、ミソラと付き合ってるってホント？」

スズカは先ほど聞いた話しをスバルにも尋ねる

「うん、ホントだよ」

ちよつと恥ずかしそうに答える

「ふーん、そうなんだ」 さすがミソラだな、世界の英雄ロックマンが彼氏なんて！」

笑いながら からかう

「僕は英雄なんかじゃないよ… ただ守りたい人を守っただけだから…」

謙遜するスバル、ただただ みんなを…ミソラちゃんを守りたい一心で

戦い抜いたためか世界の英雄と呼ばれることに抵抗を感じる

「ミソラは幸せだな」 あ、そろそろ仕事だ それじゃあね、スバ

ル君！」

ズズカはそう言った後、走って行ってしまった

（大変だなあアイドルは）

スバルは感心していた

「スバル君、こっち来て」

スバルはミソラの元へと向う

「君が星河スバル君か」

監督ウィザードはスバルをまじまじと見る

2、3個質問を受けた

何でそんな事を？と思うような質問だったがスバルは答える

・・・

「よし！ 君にしよう！」

「ホントですか？」

ミソラは嬉しそう監督に詰め寄る

「うむ、ミソラから聞いた話と直に会ってみて誠実さがわかった」

「あゝ？ なんの話しかわからないんですけど？」

恐る恐る尋ねる

「実はだ、ミソラをヒロインとしたドラマを作るのだが、相手役が決まっていなかったんだ」

「え、つまりその相手役は僕ってことですか？」

「お願いしたいのだが、どうかな？」

スバルは黙り込む

ただでさえ、昨日の記者会見で自分の正体がばれて大変なのに

ドラマなんかに出たら大変な事に…

「スバル君 お願い！」

ミソラは懇願する

「…わかったよ ミソラちゃん

僕なんかでいいんですたら お願いします」

スバルは頭を下げる

「よろしく頼むよ、でわこちらに…」

スバルは監督に連れられ事務室へと向かった

撮影期間は三ヶ月、他にも色々と説明を受け

明日から早速撮影ということになった

「はあゝ まさかドラマに出る事になるなんて・・・」

「いいじゃん いいじゃん」

がつくり肩を落とすスバルに対し ミソラは上機嫌

二人は家に帰りスバルは、あかねと大吾に

ドラマに出演することになった旨を伝える、が二人は驚かない

どうやら事前に、ミソラから提案を受けていたらしい

（昨日の予感はいったい何だったのか・・・）

スバルは思い知る

「スバル、スタッフさんやミソラに迷惑をかけるなよ？」

「…わかってるよ」

スバルは自分の部屋へと向かった

ミソラも後に続いていく

「スバル君、ホントにだいじょぶ？」

心配そうにスバルの隣に座る

了承してくれたが、半ば強引に決めてしまったような事だったので

スバルの様子を見てミソラは不安になる

「うん？ 何が？」

「何ってドラマだよ、嫌だったら断っても良かったんだよ？」

「自分の意思で決めたから、大丈夫だよ」

スバルはミソラの頭をなでる

「ありがとう、心配してくれて」

ほんのり頬を赤めながらスバルの腕に抱きつく

「えへへ」

「ミソラちゃん、これから色々よろしくね」

「うん！ 任しといて！」

「スバル」 ミソラ「ご飯よー」

あかねに呼ばれ、二人はリビングへと降りる

夕食時の話題はもちろん ドラマの話

あかねとミソラは盛り上がっていた

夕食後はスバルとミソラが交代でお風呂へと入った

「さ、明日から忙しいんだから、今日はもう寝なさい」

「はい」

二人は部屋へと向かった

「スバル君、今日も一緒に寝ていい？」

「え、きよ 今日も？」

「うん、スバル君の傍だと安心するんだ、ダメかな？」

ミソラはスバルの布団の傍にちょこんと座り、見つめる

スバルは朝方あった事を思い出す

行かないで・・・

「いいよ、大丈夫だよ ミソラちゃん、僕はどこにも行かないから」

スバルはミソラの胸中を察しミソラを抱き寄せる

いつも鈍いスバルだが、ミソラの事となると勘が鋭いのであった

「ありがとう、スバル君」

ミソラはスバルの腕に抱き付きながら眠りについた

ミソラが眠りに付いたのを確認してからスバルもまた眠りについた

第6話 企みの真相（後書き）

ドラマについては番外編を作りたいと思っています

ゝ番外ゝ ウォーロック編（前書き）

ウォーロックとハーブを視点とした話です

く番外く ウォーロック編

ピンポン

今日何度目のチャイムだろう

あかね は玄関へと向かう

記者かと思っていたが今日から来る新しい家族だった

「こんにちわー 今日からお世話になります」

『ポロン、よろしくお願いします』

ミソラとハープはあかねに挨拶をする

「いらっしやい、ミソラちゃん、ハープちゃん さ、上がって」

「邪魔しますー」

「邪魔します じゃないでしょう？ あなたは今日から家族なんだから

家に帰ってきたら ”ただいま” でしょ？」

「え、 あ、 ただいま・・・」

「はい、お帰りなさい」

あかねは 暖かくミソラを迎えてくれた

懐かしい響き

(お帰りなさい か・・・)

『お、やっときたか』

ウォーロックが降りてきた

『あらあら、待っててくれたの ロック?』

ハープはウォーロックをいじりはじめる

『ツケ、何言ってやがる、俺はおもしろい事になりそうだから 待
ってたんだ』

『はあ… ホントあんたは、ガサツね』

『ああ!? 誰がガサ 「ロック君、ダメよ、すぐ喧嘩しちゃ」』

あかねがウォーロックを止めようとする

『だいじょぶですよ あかねさん ロックとじゃ 喧嘩にもなりま
せんから』

『何だと!?!』

『何よ!』

……そんなやりとりがスバルが起きてくるまでずーっと続いていた

あかねとミソラは、最初こそ止めに入っただが無理だと感ずると

二人?を放置して会話を始めた

スバルが2階から降りてきた

ハープは直感で何かを感じウォーロックを連れて展望台へと向かった

『なにしゃがる! ハープ』

『ポロロン、邪魔はさせないわよ!』

『邪魔って何がだ!』

『ミソラとスバル君のよ!』

『俺が何時邪魔したって言うんだ』

『あんたは居るだけで邪魔になるのよ!』

ミソラの恋路は邪魔させないわ!』

・・・

『分かる？ ミソラはスバル君の事が好きなの』

『好きってなんだ？』

『好きっていうのは、その人の事ばかり寝ても覚めても気になること
と言っのよ！』

『なんだそんな事が、俺は刑事ドラマが好きだぜ！』

… ちょっと違わないか？ ウォーロック

『はあ… そういう好き じゃないのよ！』

『じゃあ、 どういう好き なんだよ』

『ミソラの好きは 愛なのよ』

『愛だ？』

『愛よ！』

・・・ 3時間後

『わ わからねえ…』

『だから、愛って言っのよ…』

何度目なのか分からないほどウォーロックは、ハープから 愛 について説明を受けていた

ついにウォーロックは燃え尽きた

真っ白になったウォーロックを連れてハープは家へと戻る

（愛 ってなんだ…愛って…

ウォーロックが立ち直るのは一週間かかったとか・・・

スバルとの間にある絆は友情

スバルはミソラを守ろうと必死になる

ウォーロックもまたスバルの為とミソラとハープを守る

ハープを守ろうとするのは結果的にミソラを守りたいとするスバルの為だと思っているが

自分では気付いていない ハープ を 守ろうとする気持ち

まだ、気付いていないだけ

自分が、知らず知らずのうちに、ハープを気にしている事を

ウォーロックがこの気持ちに気付くのはまだまだ 先の話

く番外く ウォーロック編（後書き）

ウォーロックが登場していなかった訳ですが
こういう事でした

是非 感想お願いします！

第7話 あっという間

こうして、時には朝早くからの撮影に追われながらも

ついに、最後の撮影が終了した

文字通り怒涛の三ヶ月が終わった

スバルは元々引き受けた事は何事も熱心に取り組む質なので

台本練習は毎日欠かさずミソラと取り組んでいた

その回あつてか、スバルは初めてにしてはNGが少なかったらしい

ドラマ ” 流星の出会い ” は平均視聴率40% 最高視聴率62%
%を記録した

今は打ち上げ

監督が音頭をとる

『えゝ 無事 撮影を終えました、みなさんお疲れ様でした

それでは、無事撮影が終わった事を称して 乾杯!』

《乾杯!》

スバルとミソラは子供なのでもちろんジュース

二人は互いのコップを コツン と音を立ててぶつけ合う

「ふゝ 全部終わったね！ スバル」

「うん、そうだね お疲れ様 ミソラ」

二人は撮影の影響か、いつの間にかお互いを呼び捨てで呼び合っていた

撮影中のNG話で二人は盛り上がっていた

・・・

『スバル、もう結構な時間だけど、だいじょぶか？』

ウォーロックが話かける

「え、あ、ホントだ、そろそろかえろっか ミソラ」

「うん！」

二人は監督やスタッフの人達に挨拶にいき、帰路についた

「「ただいま」」

「「おかえり」」

あかねと大吾は二人を出迎える

「お疲れ様、スバル、ミソラ」

大吾は、ぽんつと二人の頭に手をのせる

「さ、風呂にでも入って、今日はもう休みな」

「はい」

スバルとミソラは交代でお風呂に入った

「すっかりスバルもテレビ慣れしたもんだなあ」

大吾は感心する

「ミソラのおかげね」

「ああ、そうだな」

三ヶ月前のミソラの提案が功を奏した

「ふゝ すっきりしたゝ」

『ホント、いいお湯だったわ』

髪をタオルで拭きながら、ミソラがリビングへとやってきた

あかねと大吾は、自分達の間ミソラを座らせた

「ミソラ ありがとな、いつもスバルを支えてくれて」

「え、そんな… 私の方が支えてもらってます／＼」

顔が赤くなる

ぼん

大吾はミソラの頭を撫でた

大きく暖かみのある手

ミソラは笑みがこぼれる

「さ、今日はもうお休み 疲れただろう？」

「うん そうする、お父さん、お母さん おやすみ」

「「おやすみ」」

2階へと上がって行った

『スバル、寝ないのか？』

「あ、うん 寝るよ、でもミソラがまだだしさ」

『つけ、すっかりミソラと寝るのが板に付いたな』

スバルはミソラと同じベットで寝るようになった

毎晩毎晩お願いされ、ついに根負けしたのである

が、嫌な訳ではないので断る理由もない

この3ヶ月でスバルとミソラの仲は深まっていた

「うるさいよ ロック」

スバルは言い返すが決して反論はしない

「スバル〜 寝よう？」

ミソラは部屋へと入り、ベットへと向かった

「寝よつか、じゃ、電気消すよ？」

「うん」

スバルはミソラが布団に入ったのを確認すると電気を消した

「スバル 明日さ、久しぶりにデートに行かない？」

撮影が忙しくて四六時中スバルとミソラは一緒だったが、デートにこそ行けなかった

「デート？ どこに？」

「とにかくデートしよう、場所は明日決めよう？」

「わかった」

ふぁゝ スバルは大きな欠伸をかい

ミソラもつられて欠伸をした

「欠伸 うつつた！」

「はは、 ホントだ」

二人は眠りについた

第8話 デート

「スバルー 朝だよ！ 起きてー」

ミソラのソプラノボイスがスバルを呼ぶ

「うーん… おはよー ミソラ」

朝早い撮影があつたおかげか、スバルは声をかけられると

すぐ起きれるようになっていた

が、眠いものは眠い、ベットから上半身を起こ上げていたが、どこかぼうつとしていた

「ほら、スバル ご飯食べて、早くデートに行こう？」

「そうだね」

スバルは着替えてからリビングへと降りて行った

あかねと大吾に挨拶をする、二人はもう既に朝食を済ませたらしい

スバルはミソラと一緒に朝食を食べた

「そえば、ミソラ 今日はどこに行くの？」

「うーん、スピカモールに行かない？」

「うん、いいよ」

「あら、今日はデートでもするの？」

あかねが楽しそうに聞いてくる

大吾 はソファーに腰を下ろしながら

「はっはっは、久しぶりの休日なんだ、楽しんでこいよ」

「「うん！」」

二人は朝食を済まし、スピカモールへと出かるため家を出た
家を出て数歩

『ポロン、ミソラ 変装しなくていいのかしら？』

『スバルもだぜ？』

ハープ と ウォーロックが尋ねる

「「あ」」

二人は家へと引き戻った

どうもスバルとミソラは自分達が有名だということを自覚しきって
いならしい

『まったく、危なっかしいやつらだ』

『お互いに夢中なのよ』

・・・

二人は家へと戻り服装を変えた

あかね と 大吾は 家を出て数十秒後の帰宅に驚く

「忘れ物？」

「うん、変装するの忘れてた」

スバルとミソラは二階へと上がって行った

「ふふ、お互いに夢中なのね」

あかね は楽しそうに笑う

大吾も連られて笑う

・・・

スバルは、黒のジーンズに赤いチャックのポロシャツに

普段はかぶらない帽子をかぶっていた

対するミソラは、水色のワンピースに伊達メガネ、さらに髪を左右にリボンで結んでいた

（か・・可愛い）

スバルはミソラに見惚れる

「さ、行こ」

二人はウェーブライナーへと乗り込みスピカモールへと向かった

ミソラはスバルの腕に自分の腕を絡ませる

今までのスバルなら真っ赤になって抵抗の素振りを見せるが、スバルは成長していた

抵抗する素振りを一切見せず、顔も赤くなっていない

周りの視線が集まるが、物とせずミソラと腕を組んでいた

「スバルさ、全然視線とか気にしなくなったよね」

「そりゃ、撮影で慣れるよ」

それに、ミソラとこうしているのは嫌じゃないから、なおさらね！」

えへへ と笑うスバル

ミソラは顔が赤くなる

『よかったわね』 ミソラ

ハープが茶化してくる

「もう！ ハープったら／＼」

そうこう言ってるうちに目的地へと着いた

ミソラはスバルを連れて洋服店などを回った

今二人はベンチに腰を下ろして、アイスクリームを食べていた
広告塔にはミソラとスバルのツーショットが映し出されていた

「周波数がピッタリ！」

なんて文字が映し出されている

この前、ミソラが記者にスバルとの恋愛関係を暴露したためだろう
さすがに恥ずかしくなったのか、二人はベンチから腰を上げて
ショッピングモールへとまた向かった

第9話 記念（前書き）

2話続けて投稿です

第9話 記念

スバルとミソラはジュエリー店を見ていた

ミソラの足が止まる

「あ、これ可愛い…」

「ん、何？」

ミソラはショーケースに展示されている

音符の形をしたネックレスを指差した

ペアネックレスなのか対で展示されていた

スバルは何か思いついたらしく

「ちょっと待ってて」

そう告げるとミソラをおいて会計まで向かった

「お待たせ」 ミソラちょっと後ろ向いて？」

ミソラは言われるた通り後ろを向く

首に何かをかけられたのを感じた

「スバル、これ…」

「あ、うん 僕達さ、よく考えたら、付き合ってから始めのデートでしょ？」

だからさ、初デート記念にね」

スバルは自分の首にもネックレスをかけて照れくさそうに言う

「ありがとう、スバル」

ミソラは嬉しくなってスバルに抱きつく

勢いがありすぎた

スバルの変装用の帽子が取れてしまう

「あれって…星河スバルじゃない？」

「ってことは、隣の子はミソラちゃんだ！」

ツンツン髪を見られただけで正体がばれてしまった

（ま まずい・・・）

スバルは慌てて帽子を拾う

『スバル、電波変換だ！逃げるぞ』

スバルは電波変換した

ミソラを抱きかかえるとその場から去った

展望台で電波変換を解く

「ふゝ 危なかった…ありがとう、ロック！」

『っへ』

スバルはお姫様抱っこしていたミソラを降ろす

「ごめんね、スバル」

ミソラは自分が嬉しさのあまり抱き着いて

変装の帽子を落としてしまった事を気にしていた

「気にすることないよ あ！ 夕焼けが綺麗だよ ミソラ」

「え、 うわゝ… 凄い綺麗」

地平線を茜色に染める、どこまでも どこまでも…

ミソラはふと、スバルを見る

夕日に照らされて大人びて見える

どこか自分の届かない存在ではないのかと

隣にいるはずなのにそんな風に思ってしまう

「スバル・・・」

「ん？」

ミソラの顔がスバルに迫る

二人の影が重なる

「えへへ／＼ さ、帰ろうスバル！」

ミソラはスバルの腕を引っ張っていく

「うわ、 っと ちょっと引っ張らないでよ ミソラ」

「早く 早く！」

スバルとミソラは家へ向かって駆け出す

日はすっかり暮れてしまった

赤紫色の空を流れ星が一つ流れた

第9話 記念（後書き）

いかがでしたか？
感想お願いします

余談ですが今日はポッキーの日ですね

第10話 目覚めたら

スバルは目が覚めた

「うーん…」

伸びをしながら

隣を見る、そこにはミソラの姿…があるはずだった

ミソラが寝て居たであろう場所を触る、温もりはない

「あれ、ミソラ もう起きたのかな？」

スバルは着替えを済まし

リビングへと向かう

あかねに挨拶を済ませ、ミソラの姿を探す

「母さん ミソラは？」

「あら、降りてきてないわよ？」

あかねは、何を言ってるのよ っと言った様な顔で答える

「え？」

スバルは不安に駆られ、部屋へ急いで戻る

「ミソラ！」

扉を開けるのと同時にスバルはミソラを呼ぶ

・・・

返事がない

「ロック！」

『なんだ？』

「ハープを探して！」

『ああ！？　なんで俺がハープなんざを』

「いいから！」

ウォーロックの言葉を遮って、ハープの電波を探させる

ミソラが傍にいるからだ

『どこにも反応がないぜ』

ウォーロックは答える

「どこにも？」

『おう、どこにもだ』

不安で胸がいつぱいになり、最悪な展開が頭をよぎる

ミソラ…

スバルはリビングへと降りて

ミソラを探してくると言って、家を跳び出た

ミソラが居るかも知れないという心当たりを手当たり次第に探した

時刻はもう昼

スバルは最後の望みである展望台へ来ていた

誰もいない

「ミソラ… どこなんだ…」

もう行くあてなど浮かばない

ベンチに腰を下ろす

朝から何も食べてないせいか、お腹が鳴る

『スバル、一旦家に戻って飯を食べた方がいいんじゃないか？』

ウォーロックはスバルを気遣う

「…一旦、家に帰ろうか」

スバルは家へと向かった、足取りが重い

「ただいま」

「おかえり」

あかね はスバルを出迎える

「ミソラ、どこに行っただろう…」

事故とかに遭ってないよね？ 何かあったら、僕は…僕は…」

スバルは取り乱しながら、胸の内をあかねに打ち明ける

さすがに、これ以上は…と思ったのか

ミソラが2階から降りてきた

「スバル」

え？ スバルが声の方を向く

そこに ミソラ が居た

「ミソラ！ どこ行ってたのさ 心配したんだよ」

ミソラ に詰め寄る

「あかね、スバル、実は…」

どうやら、ミソラ失踪は、計画的犯行だったというのがわかった

ミソラ、あかね、ハープ、それにウォーロックまでもが共犯でやっていたらしい

始まりは、ミソラが

もし私が急にいなくなったら スバルはどうするのかな？ から始まった

朝食を食べながらミソラは、あかねとハープに聞いた

どうせなら やってみよう、なんて展開となり 今に至る

スバルは半ば呆然としている

あかねとハープは、予想通りの展開だったので楽しそう

ウォーロックは案の定、おもしろそうだったから

と協力していたらしく、スバルを見て笑っている

ミソラは上機嫌だ

あんなにもミソラを心配してくれるスバルを見て、素直に嬉しかった

全てを理解したスバルは安堵する

が、ここからスバルの逆襲が始まった

第11話 仕返し

スバルは空いていた口を閉じて、少し考え込む、やがて

「ミソラ… やってもいい事と悪い事があるのは分かるよね？」

低い声でミソラに言う

内心、ミソラが無事だとわかった事が何より嬉しかったが

やり返さないと気が収まらないのまた事実

「うん」

「じゃあ、僕がどれだけミソラを心配したと思う？これってやっていい事かな？」

「そ それは… ご ごめん」

怯えながらミソラは謝る

無論、スバルは怒った振りをしている

「… 僕 出かけてくるね」

スバルはそういい残し家を出た、勿論、行き先は展望台

・・・

「ど どうしよう…」

ミソラは涙目になりながら、ハーブに意見を求める

『やりすぎたわね ミソラ、いつもは怒らないスバル君が怒るとなると大変ねえ…』

「そういえば、私もスバルが怒ったのを見るのは初めてかもしれないわね」

あかねは腕を組み顎に手を当てて考える

「これは、素直に謝った方がいいわね」

『そうですね ミソラ、スバル君は展望台にいるわよ どうするの？』

「行こう ハーブ」

ミソラはスバルを追って展望台へ向かった

ピローン

あかね のハンターが鳴る

スバルからのメールだ

「ミソラに仕返すから協力してね、あと怒ってないから大丈夫！」

メールを見て 目を丸くする

あの スバル が < 仕返し > か

「ふふ、ミソラも大変ね」

あかね は笑う

「今日はスバルの好きなハンバーグにしようかしらね」

晩御飯の食材を買いにあかねは出かけた

スバルはウォーロックを連れて展望台へ来ていた

「さ、ロック ミソラに仕返しするから手伝ってね！」

『あん？ お前怒ってたんじゃないのか？』

ウォーロックは首をかしげる

「怒っていないよ、ただ、なんか ミソラ にやられっぱなしってのは嫌だからね」

たった三ヶ月の撮影だったがスバルの演技は

あかねやミソラ、ハープ、ウォーロックにさえ気付かれていなかった

『おもしろそーだな、で、俺は何をすればいいんだ?』

「あのね…」

スバルはウォーロックに指示を伝える

ミソラは息切れしながら 階段を登った

スバルは手すりに肘をつけて空を眺めてる

スバルがミソラに気付く

「ス スバル あの…さっきはごめんなさい!」

ミソラは頭を下げて謝る

「スバルが、私の事どう思ってるの気になって…それで、その…」

「許さないよ」

ミソラは氷つく、「許さないよ」何度も頭の中で木霊する

『ス スバル君 今回ののは…』

『ハープ、てめえーはこっちにきやがれ』

ウォーロックがハープの話を遮ってどこかへと連れて行く

ミソラは目に涙を溜めてる、泣かないよう必死に堪えていた

「ス スバル…」

涙を堪えるのに必死で言葉が出て来ない

「ミソラ、今どんな気持ち？」

「グス… スバルが、居なくなると思うと… グス… 怖いよお…」
ついに堪え切れなくなって、涙が頬を伝う

「うん、そうだね？ 僕は朝起きてミソラが居なくて

探しても探しても居なくてすごい不安だったんだ、どう わかった
？ 僕の気持ちか」

ミソラは コクリ と頷く

「もう、こんな事しない？」

ミソラは頷く

「よし、じゃあ許してあげる！」

スバルは笑顔でミソラを抱きしめる

ミソラはスバルの胸で泣いている

（うーん、やりすぎたかなあ？）

流石にスバルも反省して、ミソラの頭を撫でる

ハーブとなぜか傷だらけのウォーロックが戻ってきた

『ミソラ、スバル君に仕返しされたわね』

「もう、こんな事しないもん！」

目を真っ赤にしたミソラは答える

「さて、帰ろうか ミソラ！ 僕朝から何も食べてないからお腹すいちゃった」

泣きすぎたためか、目が真っ赤になったミソラを連れてスバルは家へと帰った

テーブルの上にはハンバーグが並べてあった

いい匂いだ、ぐー スバルはお腹が鳴る

「もうちょっと待ってね、スバル」

あかねはキッチンからスバルに声をかける

ミソラもキッチンへと向かい あかね の手伝いを始めた

スバルはその風景を見ながら 微笑む

晩御飯のハンバーグは美味しかった

お風呂に入り、今はベットの布団の中

隣にはミソラがいる、いつの間にか当たり前のようになっていた

ミソラが居るのを確認すると スバルは安心して眠りについた

第11話 仕返し（後書き）

そろそろスバルの復学させようかなと思っています

余談ですが

作者は明日 奨学生試験の集団面接があるのですが2回しか練習を
していません！

なんとかなるさ！ 明日頑張ってきますー

第12話 復学（前書き）

昨日話した通り復学させます！

第12話 復学

休学中の半年間は、様々な事があった

ドラマに出演した事、ミソラとたくさんデートをした事

時には、ミソラの悪戯に頭を悩まされた事もあった

スバルは今日からコダマ小学校への復学だ

一ヶ月間で、遅れていた勉強は取り戻した

勉強の遅れに対する不安はないが

みんなが自分を忘れてしまっているのではないか、という不安がある

スバルは今、教室の入り口、つまり廊下にいる

どこか地に足が着いていない、ソワソワした感じがする

「えー 今日から学校に復学する生徒がいる、入ってきなさい」

先生がスバルを呼ぶ

スバルは深呼吸を一回すると教室へと入った

ガラガラ

【おかえり〜！】

委員長こと、白金ルナを先頭にキザマロやゴンタ達は、スバルを出迎える

黒板には、おかえり！ 世界の英雄 と書かれていた

目頭が熱くなる

「ただいま！」

半年振りの再会だ

「スバル君！ 勉強はしてきたんでしょうね？」

ルナは尋ねる

「あ、うん、勉強はちゃんとしてきたよ！」

スバルは笑顔で答える

「じゃあ、なんで私達に一切会いにこなかったの？」

・・・

（忘れていたなんて言えない…）

スバルは表情こそ変わっていなかったが、内心滝のような汗が出ていた

（やばい、やばい、やばい、どうしよう…！）

・・・

「いや、なにかと忙しなさ...ごめんね」

苦し紛れの返答

「ふーん、忙しかったのね、それは何かしら、ミソラちゃんとのデートでかしら？」

いつの間にか、ルナの笑顔から優しさは消え、黒いオーラが吹き出ている

キザマロやゴンタ達は、一歩下がっている

（まずい、まずい、まずい！）

スバルは追い込まれた

「え、や、そんな事ないです」

プレッシャーに負けてか敬語になる

「へえ、じゃあ、昨日なんでミソラちゃんとデートしてたのかしら？」

「！！！！」

「み...見てたの？」

ついに表情までもか真っ青になる

「やっぱり、デートしてたんじゃないの！」

はめられた、スバルは、ルナの誘導尋問にまんまと引っ掛かった

ついに、スバルは観念する

「スイマセン！」

スバルは神速のスピードで土下座をした

さすがに、土下座までされると思っていなかったのか、ルナはたじろぐ

「委員長、もう、その辺にしとけ（しといていてあげたら？）」「」

声が重なる

「…もう、いいわ スバル君」

ルナはスバルに頭を上げるよう促す

「今はまあ、私達の事を忘れていたと言うことは、なかった事にし
といてあげるわ」

（はあ…良かったあ…）

スバルはほっと胸を撫でる

「放課後、ミソラちゃんとの関係を説明してもらってから、覚悟しときない」

ビキッ

先ほどより、まずい状況に追いやられたことに気付くスバル

「は はい……」

ルナは自分の席へと戻っていった

(どうして こうなった……)

肩をがっくりと落とす

「スバル(君) どんまい だ(です)」

キザマロとゴンタは、^お^うの言葉をかけ、スバルの肩にぽんと手を置く

第13話 再開

気分が重い

「はぁ…ん、あれ？　そういえば、さっき委員長を止めてくれた声って・・・」

スバルは委員長を止めてくれた、存在の事を思い出した

「スバル君！　久しぶりだね！」

「え、　　ツ　ツカサ君？」

「うん！」

緑の髪をしたツカサこと、双葉ツカサは

随分前に、ヒカルとの和解の旅に出ていたはずだった

「ツカサ君、ヒカルとは和解出来たの？」

「うん、僕はヒカルと共存していく事を決めたんだ」

ツカサの目に宿る強い意思をスバルは見た

「そっかー、ヒカルと和解できたんだあ、　　おめでとう！　ツカサ君

」

スバルは心の底から喜び、また祝福する

「ありがとう、スバル君のおかげだよ」

「そんな、僕は何もやってないよ・・・」

「スバル君と友達になれたから・・・」

それが僕にとって、一番大切な事だって事を教えてくれたんだ」

スバルは照れくさそうだった

「スバル、俺からも礼を言わしてくれ」

「あ、ジャックじゃないか！」

黒髪のツンツン髪、ジャックは照れくさそうに、頬を掻きながら言う

「あの時（メテオGの中）、お前に生きる道を教えてもらってなければ

俺はここにはいねえー だから、その…サンキューなスバル！」

スバルは嬉しさで胸がいつぱいになる

友達になりたいと思った 人たちから

こんな風に言われるとは思っていなかったからだ

「ツカサ君、ジャック、ブラザー結ばない？」

スバルは一步踏み出す

「俺はいいぜ」

ジャックは嬉しそうに笑う

「スバル君、僕は…」

「過去は関係ないよ、これからを…、今を大切にしていこう?」

スバルはツカサに手を差し伸べる

「ありがとう、スバル君」

ツカサはスバルの手を取る

そして、3人はブラザー契約を結んだ

久々の授業は新鮮だった

お約束ともいえる、ゴンタの宿題を（やり）忘れました

クラスは爆笑

「牛島、ホントなんだな? 家に忘れてきただけ、なんだな?」

「お おう、そうだぜ?」

「そうか、じゃあ、明日必ず持つてきなさい、明日提出しなかったら宿題を倍にするからな」

先生は ゴンタを脅す

「りょ 了解したぜ」

見慣れていた光景も半年居なかったただけで新鮮だった
学校が楽しくてしょうがなかった

- 放課後 -

スバルは帰ろうとする

大事な 命令 を忘れて

「スバル君、ちょっといらっしやい」

...

(忘れてた...)

「は はい...」

ルナに連れられて行く スバルを 4人は見送った

「『頑張れ スバル(君)』」

スバルは、屋上で正座をしてルナに説明をした

軽く1時間が経った、やっと納得したのかルナから開放された

黒いオーラは留まる所を知らない

逃げるようにその場から去った

一人屋上に残ったルナの頬には、涙が伝った後があった

スバルはやつれた表情で帰路につく

「っ 疲れた…」

『クツクツク、 スバルもあの女には勝てねえな』

ウォーロックは笑う

反論する気も起きない

スバルは家へ着くと、倒れこむようにベットで眠った

第14話 待ち人

スバルが学校で授業をしている間、ミソラは新しいCDの打ち合わせをしていた

新曲のレコーディング作業に追われるため、今日の帰宅は深夜頃になる

今は休み時間

「はあ、スバルに会いたいなあ」

ミソラは呟く

『早く終わらしたら、すぐにスバル君に会えるわよ、早く終わらしちゃいなさい』

「分かった！」

ミソラは張り切って、仕事に向かった

『健気な子ね』

ハープは微笑む

スバルは目を覚ます

時間は21時

「うわゝ 寝たなあ…」

帰ってきたのが17時だから4時間は寝てる

スバルはリビングへ降りた

あかねと大吾は、ソファでテレビを見てた

「あれ、ミソラはまだ帰ってないの？」

「今日は、打ち合わせだから、帰りが遅いらしいわよ」

あかねは答える

「そうなんだ」

テーブルの上に並んである、おかずとお茶碗 2つ

スバルは寝ていたので、まだ、ご飯を食べていない

「んゝ なら、ミソラを待つてようかな、寝て 眠くないし」

スバルはそういうと腰を下して、テレビを見る

「ふふ、やっぱり、ミソラを待つね」

あかねは今日も楽しそう

大吾に至ってはニヤついている

時刻は22時

「んゝ 終わったあ！」

ミソラは伸びをする

『さ、帰りましょうか』

「うん！」

ミソラはスタッフさんに挨拶を終えると帰路についた

「ただいま」

「「「おかえり」」」

3人はミソラを出迎える

あかねはおかずを温めなおし、ご飯を盛った

「あれ、スバル、まだ起きてたんだ」

「うん、ご飯もまだなんだ、早く食べよう？」

「うん！」

二人は楽しそうにご飯を食べた

気を利かしたのか、あかねと大吾は自分達の部屋へと戻っていた

その後、二人はお風呂に入り、布団の中へと潜った

ミソラとスバルは、今日あった事をそれぞれ話す

一通り話終えた後、二人は眠りについた

布団の中で二人は手を繋いでいた

第14話 待ち人（後書き）

どうでしたか？ 感想お待ちします

ドラマ編の番外をばちばち書こうかなと思ってます！

第15話 日常と提案

すっかり普段の日常に戻ったスバル

いや、日常は少し変化したのだが…

スバルは、世界の英雄であり、人気ドラマのミソラの相手役もやったのだから

休み時間は、ひっきりなしに他学年の生徒に詰め寄られている

これが、今の彼の日常 なのだ

ミソラ曰く、慣れれば平気だよ だそうだが、慣れとは凄いものだ

何人目かわからない程の握手を終え、スバルは委員長達と昼食を取った

ルナ達も、もう既に慣れているのか、スバルに詰め寄る生徒に一刻感心を示さなくなった

「んゝ もう秋だねえー」

スバルは窓枠に肘をついて、山を見る

季節はもう秋、山は紅く染まり、夕暮れの時間も日々早まっていた

「星河君」

ルナが呼ぶ

いつの間にか、ルナは、スバル君 から 星河君 と呼ぶようになった

「何、委員長？」

「来月の10月に3連休があるでしょう？ その日に旅行に行くわよ」

なぜ語尾に？がない それはもう命令形だ

「ん、なんでいきなり 旅行なんて？」

スバル は 命令形の文章には突っ込まず 真意を聞いた

「あなただけ、休学してて 修学旅行に行っていないでしょう？」

6年生最後の思い出がないのは寂しいじゃない」

ルナ なりにスバルを気遣ったの提案だった

「え、いいの？ 僕だけのために旅行に行ってくれて」

「当たり前でしょう、私達はブラザーなのよ？」

キザマロやゴンタ、ツカサ に ジャック も頷く

「…ありがとう」

いつも救われているな　と感ずる　スバル

（ほんと…　委員長には敵わないや…）

「で、どこに行くかを今日、スバル君の家で決めましょう」

「うん、わかった！」

キーン　コーン　カーン　コーン

授業の開始を告げるベルが鳴る

スバル達は　それぞれの席へと戻って行った

（旅行　か…、　楽しみだなあ）

スバルは終始笑顔をだった

- 放課後 -

押し寄せる生徒の奔流を掻き分けて

スバル達は家へと向かった

「さて、旅行はどこに行こうかしらね？」

早速、旅行の行き先を決める事にした

「はい、はい、俺は牛丼が食べれる所を希望するぜ」

「ゴンタ、話を聞いていたのかしら？」

笑顔を裏に壮絶な黒いオーラを噴出しながら、返答を促す

「な…なんでもないぜ」

ゴンタは黙った

「次！」

「ははいっ、僕はヤエバリゾートに…」

「それは、私達が修学旅行に行った所でしょう？ 次！」

キザマロ も 震えながら 黙る

ツカサ、ジャックも黙り込む

下手な事を言っではいけない

5人は暗黙の了解を瞬時に察知する

「まったく、こんなにも案が浮かばないとはね…星河君 どこがい
かしら？」

矛先がスバルに向く

「え、ぼ 僕！？」

「そうよ？ あなたのために旅行に行くんだから、あなたが行った

い場所にしましょう」

まさか の展開

「うーん…、 シャーロとかの夜景が見てみたいかなあ」

シャーロは北国なので空気が澄んでいる なので 星 がよく見える

「シャーロね、どうかしら、みんなは？」

「異論ないぜ（です）」

「うん、 シャーロなんて行った事ないからなあ」

「あそこは寒いぜ？」

上からゴンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックは答える

「あら、ジャック、行った事あるのかしら？」

「ああ、昔、ちょっとな…」

ジャックの顔に陰りが生まれる

「ジャック！ あなたはもう昔のあなたじゃないのよ

そんな過去なんて、あなたが背負っていけばいいだけの事ですわ！」

ルナはジャックを励ます、もとい命令する

ジャックは 目を丸くする

（背負っていけ か・・・）

「…ありがとな 委員長」

小さく呟く、ルナはちゃんとこの感謝を聞いていた

「さて、旅行地はシャーロに決定したとして、何をしようかしらね？」

うーん…、みんなは腕を組む

結局、この後は何も浮かばなかった

夕方になり、みんなはそれぞれの家へと帰っていった

「ただいまー」

ミソラが仕事から帰ってきた

「おかえり」

寒かったのか、ミソラは頬を紅く染めていた

スバルは自分の両手でミソラの頬を包み込む

「えへへ、スバルは暖かいなあ」

嬉しそうに 笑う

「あ、そうだ、ミソラ 来月のさ3連休空いてる？」

「来月の？ ちょっと待ってね、ハープ」

『ポロン、んー… 残念ね、ライブが入ってるわ』

「そっか…」

スバルは残念そう

「どうかしたの？」

「実はね…」

委員長の提案で、シャーロに思い出を作り旅行に行く事になった事を伝えた

「ふーん、そうなんだ、でも、お仕事だからしょうがないね！

それに旅行なんだからさ、6人で思い出を作ってきなよ」

ミソラは少し残念そうだが、スバルの為に旅行を後押しした

「うん、楽しんでくるね！ その代わりミソラもライブ頑張るんだよ？」

「うん！」

二人は 指きり をした

夕食の際にスバルは、あかねと大吾に旅行の話をした

二人とも賛成してくれた

「いい友達を持っ たな」

大吾はスバルの頭を撫でる

「ミソラもライブ頑張るんだぞ？」

「うん！」

本格的な冬の到来を告げる秋風の中、今日も星河家は暖かった

第15話 日常と提案（後書き）

今日はまだまだ 投稿 したいと思いますー

第16話 出発（前書き）

旅行編です

第16話 出発

10月の半ば、やっとテストを終えた

明日からは、待ちに待った旅行だった

移動だけで半日かかるので

2泊3日の旅行は、実質1日しかシャークを楽しめない計算になる

スバル は荷造りを始める

ミソラはライブがあるので昨日から出かけていた

逸る気持ちを抑えて、眠りついた

朝を迎える

時刻は6時30分

んゝ 伸びを一つしてから

リビングへと行き朝食をとった

集合時間は7時15分

スバル は 余裕を持って出かけた

ウェーブライナーの乗り込み場の前で待つこと数分

続々と集まってきた

なんと、遅刻の常習犯であるゴンタの姿もそこにはある

「え、ゴンタ!?」

スバルは驚きのあまり、口に出す

「へっへー、今日の俺は一味違っぜ!」

胸を張るゴンタ、横から委員長の肘打ちを腹にくらう

「私が朝、起こして上げたんでしょう!」

「す すまねえ ついな…」

なるほど、ゴンタはルナに起こしてもらっていたのか

最後の一人は、なんとジャックだった

余裕を持ってきたつもりが ルナ に一括

「遅い! ジャック」

えー…時間よりも早くきたのに何で俺が…

肩を落とすジャック

「お前が最後だからだ」

最後の部分を強調して言う　ゴンタ

なんで、ゴンタなんかに…

ますます気を落とすジャックを連れて、一同はウェーブライナーへと乗り込んだ

国際空港へと向かい、飛行機に乗り込んだ

余談だが、手荷物検査の際、ゴンタのポケットから出てきた大量のごみに

検査員の人は、苦笑いせずにはいられなかった　という

スバルはそろそろミソラが起きる頃だなあ　と　メールを送っていた

「おはよ　ミソラ、これからシャーロに行つて来るね！

ミソラもライブ頑張るんだよ？　約束だよ」

『スバル、お前はホントにミソラが好きだな』

ウォーロックは茶化す

「うるさいよ　ロック、なんならハープにもメール送っておいてあげようか？」

『っけ　遠慮しとくぜ』

「素直じゃないなあ」

スバルは笑う

6人はシャーロの地へと降りた

「さむ!!」

ジャックの言った通りシャーロは寒かった

ゴンタなど、いつもの服装のままだ、寒気が肌を刺す

ゴンタはすぐ様着替えた

キザマロは寒いのか何枚も重ね着をしている

観光地を6人で周り、日が傾いてきた

6人は宿へと向かった

「うわ〜」

辺りには高い建物などいくらでもあったが

スバル達が見ている建物は、その中でも群を抜いていた

案内された部屋はファーストクラスだ

明らかに高級そうな物ばかりが置いてある

ソファー一つを取っても、無駄にでかいのだ

「やっぱり、ファーストクラスでなくちゃね！」

ルナ はご満悦

5人は啞然とする、文字通り、お金の桁が違うのだから

「さ、今日はもう寝ましょう、明日から楽しみましょう！」

6人はそれぞれ、ワンルールの部屋へと向かった

無駄にでかいベット だ

落ち着かないが、移動で疲れていたのか、すぐ眠りについた

第17話 シャーロ

スバルは朝早くから目を覚ましていた

カーテンを開けた

まるで虹の粒のようなものがヒラヒラと舞っていた

極寒の地ならではの現象、ダイヤモンド ダスト現象だ

空気中の水蒸気が急激に冷やされたため

小さな氷の粒となり、日光の光を反射するため

ダイヤモンドダスト と言われるそうだ

「うわー・・・」

幻想的な景色に息を呑むスバル

「ミソラにも見せたかったなあ・・・」

やがて、ダイヤモンドダスト現象は 見れなくなった

スバルは部屋から出る

大広間には、もう既にみんなが起きていた

挨拶を済ませ、今日の予定を決める

結果スバル達はシャーロにしかない物を見て周る事にした

歴史的建造物、芸術品、特産品などを見て周った

キザマロ は歴史的建造物にテンションが上がり

ルナは芸術品を見て周り

ツカサやジャックはシャーロの風土を楽しんだ

ゴンタは常に手に食べ物を持っている

彼は彼なりに楽しんでるらしい

おっと、スバルを忘れていた

スバルはあかねや大吾、ミソラへのお土産を選んでいた

あかねには、ガラス細工の特産品を、大吾には特産物の食べ物大量に

ミソラへのお土産は考えに考えたあげく

瑪瑙^{めのう}でできた 獅子座と琴座のブレスレットを選んだ

もう、夕暮れ時だった

買い物を終えたスバルはルナ達との合流を果たし、食事をとった

夜になると空は当たり一面 星空 だった

地平線から続く、星空に魅了される

空気が澄んだ、シャール口ならではの夜空に、6人は食い入るように眺めた

どこまでも 続く星空

伸ばせば 届くのではないかと、錯覚させられるような、そんな夜空だった

「委員長、それにみんな、旅行に誘ってくれてありがとう」

スバルは 5人に感謝した

6年生としての思い出をこの5人で過ごせた事が嬉しくて、しかなかった

流石に寒くなってきたので、スバル達はホテルへと戻った

部屋に内设されている、お風呂を交代で入ったスバル達は

修学旅行ならではの、トランプや他愛もない会話を始めた

あっという間に、2泊3日の旅行は終わった

最高の思い出を胸に刻んだスバル達は、満足気だった

「それじゃあ、また明日!」

「『『『うん また明日！』』』」

スバルはみんなと別れた後、荷物とお土産を抱えて帰路についた

「ただいまー」

あかね、大吾、ミソラはスバルを迎える

スバルはお土産を渡した

あかね にガラス細工の特産品を

大吾 には 大量の 特産物の食べ物

そして ミソラには 瑪瑙のブレスレットを

ミソラは 魅入っていた

「それね、瑪瑙っていう石でできてね

ミソラの星座と琴座を掘ってあるやつを選んだんだけど とうかな
？」

「ありがとう、凄い嬉しい… 大切にするね！」

ミソラはスバルに抱きつく

「わっと、あ、ミソラはライブはどうだった？」

ミソラはスバルから離れると、指でVサインを作って見せた

「大成功！」

「よかった！」

二人は笑顔だった

スバルは旅の思い出をあかねや大吾、ミソラに話した

お土産や土産話で盛り上がった

長く話をしていた、スバルは一つ欠伸をする

「スバル、今日はもうお風呂に入って、休みなさい」

「うん、そうする」

スバルは風呂に入り、布団へと入った

旅の思い出が頭の中を巡る、楽しかったなあ・・・

ふと、スバルはミソラを見る

ミソラは手につけた瑪瑙のブレスレットを見ていた

「ミソラ？」

「ん？ どうしたの スバル」

「いや、ずっとブレスレット見てるからさ、どうしたのかなあ っ

て」

「あ、うん、凄い嬉しくてさ……ちゃんとハープの事も考えてくれてたし」

「当たり前だよ」

「ありがとう!」

ミソラはそう言って、スバルにキスをした

夜もすっかり深まった頃、まだスバルの部屋には小さな電気が灯っていた

第17話 シャーロ（後書き）

旅行終わらせちゃいました！

あんまり長いのもアレだと思ったので

それにしても瑪瑙のブレスレットとはスバルやりますね！

第18話 胸の内

季節は冬へと移り、ちらほらと雪が舞っていた

ミソラは相変わらず、忙しそうだった

クリスマスライブがあるらしいので、そのせいだろう

一方スバル達は迫りつつある卒業に向けて、在校生へと残すものを考えていた

6年間通った学校だ

それぞれの思いはあるだろう

結果、その感謝の気持ちを言葉として学校に残すことにした

自分達がここに居た事を忘れないように、そして、新しい自分へと進むために

ルナは生徒会長なので、色々と忙しかった

否、ホントに忙しかったのはスバル達だが…

中でも、ゴンタ、キザマロ、ジャックはこき使われたらしい

もちろん、スバルとツカサも仕事の手伝いをしていたが

この3人だけは仕事量がちょっと多かったらしい

まあ、理由は簡単なんだが

ジャックがボソッと

「威張るだけの女」　　っと

もちろん、この陰口はルナの耳に入り

結果、とばっちりを受けたゴンタ、キザマロも仕事量を増やされた
という話だ

無論、ジャックは2時間の説教が待っていたらしい

涙目だったのは、彼が可愛そうだからあえて言いはしない

放課後の教室

スバルは窓から外を見ていた

薄暗い空から、舞い落ちてくる雪を

今年のクリスマスはホワイトクリスマスになりそうだ

「星河君」

物思い耽っていたスバルは現実へと引き戻される

「何？　委員長」

「今年のクリスマスはどうするのかしら？」

ルナにしては珍しく、命令形ではない

「あ、うん、どうしようかな」

スバルはまだ予定を決めていなかった

ミソラとデートに行きたいなと思いつつも

最近忙しいミソラの迷惑にはならないかと考えていたからだ

「どうしようって、ミソラちゃんと、どこかに行かないのかしら？」

「僕も、ミソラとデートに行きたいんだけどさ、最近忙しそうだから……」

「まったく！ あなたって人は……」

ルナは頭に手をやって溜息をつく

「いい？ ミソラはちゃんは確かに忙しくて疲れてるかもしれないけど」

それ以上に、あなたにデートに誘われる事が嬉しいのよ」

「え、どゆこと？」

鈍い…… ルナの顔に一つ青筋がたつ

ビクッ

スバルはルナに睨まれ、怯えた

「まったく！　いいかしら？　ミソラちゃんはあなたとクリスマス
を過ごす方が

嬉しいに決まってるって言うてるの！

どんなに仕事が忙しくて、疲れてても

ミソラちゃんにとっては、あなたと過ごしていたって事！」

ルナにここまで言わせてやっと気付くスバル

「そっか、うん、僕　今日ミソラに話してみるね、　ありがと　委
員長！」

スバルはとびっきりの笑顔をする

ズキン…　胸が痛む

「それじゃ、クリスマスパーティーは、あなたとミソラちゃん抜き
でやるわ」

そう告げると、ルナはゴンタ、キザマロ、ジャックを引き連れて帰
った

胸の痛みは収まらない

（私、なんであんな事言っただろう・・・）

元気がないルナを見て、ゴンタ、キザマロは慌てる

ジャックは 見透かしたかのように

「苦しいなら、苦しいって言えばいいじゃねーか」

ポロポロ

ルナの目から涙が毀れる^{こぼ}

うう… 呻き声とも似つかない 悲哀に満ちた声が毀れた

ゴンタ、キザマロはさらに慌てる

ジャックは無言でハンカチを渡す

「俺達からは何もきかねーよ、もしお前が喋れるようになったら、その時に聞け」

素っ気ない態度のようだが、ルナはジャックの思いやりが分かって
いた

首をかしげるゴンタとキザマロを引っ張りながら、ルナの少し前を
3人は歩き始めた

ルナはジャックから渡されたハンカチで涙を拭きながら

3人の後を少しはなれて歩いた

『 スバル、お前は女には頭があがらねえんじゃねーか？ 』

くつくつくと 笑いをかみ殺しながら笑う ウォーロック

スバルはウォーロックの小言を聞き流す

スバルは少し考えた後、帰路についた

第18話 胸の内（後書き）

今回はルナの胸の内を書いてみました

星河君 から あなた と呼ぶようになった件は^{くだり}
ルナの心中を描いてみました

第19話 誘い

その夜、スバルは部屋の椅子の背もたれの部分を前にして座っていた

ミソラは今風呂に入っている

「うーん、どうしよかな」

ルナに言われた通り、ミソラをデートに誘おう　と決断したはいいが
行く場所も何も決めていなかった

『ポロロン、どうしたのかしら？　スバル君』

ハープが　部屋に入ってきた

「あ、ハープ！　ちょうどいいや、ミソラにさ

クリスマスの日にデートに行こう　って誘おうと思うんだけど、ど
こにしたらいいかな？」

ハープ　は　少し考え込む

『それは、　やっぱりスバル君が決めないとね

でも、ミソラはスバル君とデートできるならどこでも良いと思うわ』

最低限のフォローをいれる

「うーん、じゃあ、遊園地とかで思いっきり遊ぼうかな？」

『それがいいかもしれないわね、ミソラもアイドルとしてじゃなく
て』

一人の女の子として、たまには思いっきり遊ぶことが必要なのかも
しれないわね』

「そうだね！ よし、ミソラが上がってきたら話そうかな！」

「ん、何の話かな？」

タイミングが良いというのか悪いというのか、そこには、タオルで
髪をふくミソラが居た

「あ、うん、ミソラ クリスマスの日にさ、デートしない？」

「え、デ デート？／＼」

ちよつと顔を赤らめる

「うん、デート！ あ、でも仕事があるのかな…？」

「あ、だいじょぶだよ！ 24日は仕事だけど、25日は休みにし
てもらったから」

「それなら、だいじょぶだね。遊園地で思いっきり遊ぼうか！」

「うん！」

「でもその前に、ミソラのライブを見に行かないとね！」

「絶対成功させるから、任しといて！」

「楽しみにしてるよ」

スバルは 笑顔 で ミソラを見上げる

「さて、お風呂に入ってくるね」

スバルは 着替えを持って 風呂へと向かった

ミソラ は スバルに誘われた デートの事を考えていた

思い返すだけでも 顔が赤くなる

（スバルにデートに誘われた… 嬉しいなあ…）

『ミソラ、よかったわね』

「うん、凄い嬉しい…」

自分の頬に両手を当てる、ミソラ

その手につけたあった瑪瑙のブレスレットが目に入る

獅子座と琴座の星座を象った瑪瑙

スバルがシャーロ口で買ってきてくれたお土産だ

「私もスバルに何かプレゼントしたいなあ……」

『あら、それはいいわね』

「何がいいかな？」

『そこは、ミソラが考えないとね？』

「だね！」

ミソラはベットに寝転がり、ブレスレットを見ながら考える

やがて、スバルは部屋に戻ってきた

ベットで考え込むミソラを見て、どうしたのかな？　とは思ったが

声はかけず宿題をする事にした

部屋にしばしの沈黙が流れる

沈黙を破ったのはスバルだった

「ミソラ　寝よっか」

「あ、うん」

電気を消して　二人は眠りについた

第19話 誘い（後書き）

さて クリスマスデートはどう書いたものか…

第20話 似たもの同士

ミソラ はライブの打ちあわせの合間を使っ

街に出て色々なお店を巡った

「スバルに何がいいのかなー」

色々な物を見てきたが、これと言って決まった物は出てこなかった

『ミソラ、大事なものは、何に感謝の想いを籠めるかよ?』

「分かってるけど、何にすればいいかが、わからないよお」

見かねたハープは助け舟を出す

『まったく、例えばね、クリスマスとしてはベタなマフラーを送ることにした としましょう』

そのマフラーを自分で編んで作ったとしたら

それは、ミソラの想いが籠められた物じゃないのかしら?』

ミソラはハープの提案に目を輝かせる

「そうだね! じゃあ私、スバルにマフラーを編もうかな!」

『でも、ミソラ あなた縫い物ができたかしら?』

意地悪そうに笑うハーブ

う… 痛い所をつかれた

「お お母さんに 教えてもらうもん！」

ミソラ は 膨れっ面を作りながら、毛糸を求めて雑貨店へと入って行った

その夜からミソラは、こっそりあかねに

マフラーの縫い方を習って編み始めていた

あかね はその様子を見て微笑む

（健気な子ね、まったく、スバルには勿体無いくらいね）

何度も間違えながらも少しずつ形になっていくマフラー

ミソラは日頃の感謝を籠めて編んだ

一方スバルもまた

ミソラへのプレゼントを考えていた

まったく、この二人はどこか似ていると言っのか何と言っのか…

『はあ…、 まだ決まらねえのか！？』

「あー、もう何にしよう・・・」

首にかかっていたネックレス　を手取る

音符型のネックレス、初デート記念にプレゼントしたやつだ

『スバル、シンプルにいかねえか？　マフラーとかよ、ミソラ持つてないだろ？』

痺れを切らしたウォーロックは、なんとなく思いついた　マフラーをあげてみた

「あ！　マフラーね！　ロック　ナイスだよ！」

なんとなくあげたマフラーに食いつく　スバル

『お　おう？　でも、いいのかスバル？』

「うん！　大事なものは　気持ち　だからさ」

スバルは満面の笑みでウォーロックを見る

ウォーロック　は　いいのか？　と思っていたが

感謝されたため　ま　いっか！　的なノリになっていた

『っへ、ちょっと散歩に行ってくるぜ』

「わかった、行ってらっしゃい」

ウォーロックは 展望台へと向かった

ハープもやってくる

『何か用事か？』

『いえ、あなたが一人で展望台にいるから何かしら と思ってね』

ふん ウォーロックは鼻で笑う

『スバルのやつ、さっきまでミソラへのプレゼントを考えてやがったんだ』

『あら？ スバル君も？』

ハープは目を丸くする

『なんだ ミソラもか？ っけ、世話の焼けるやつらだぜ』

『ロックがそんな事言うようになるなんてね』

『ああ！？ 喧嘩売ってんのか？』

『違うわよ 変わったって言うてるのよ！』

『っけ、もう1年も居るんだ 変わりもするさ』

ハープは 心底驚いた

あのウォーロックの口から出た言葉に

同時に安心感も生まれた

もう復讐に燃えていたウォーロックが居ないことに対して

暫くの間 沈黙が流れた

やがて ウォーロック は口を開く

『さて、帰るか』

ウォーロックはハープと共に帰路についた

第20話 似たもの同士（後書き）

もう一つ 投稿です！

感想よかったら お願いします！

第21話 ライブ

ここはコダマスタジオ

今日のゴンタ、キザマロ、ルナのテンションは高かった

それはそうだろう、今日はミソラのライブなのだから

3人の上がり続けるテンションに

スバル、ツカサ、ジャックは負けていた

いや、ルナが居る時点で負けは決まってるのだが・・・

が、スバルもまたこの日を楽しみにしていたので

3人に負けずのテンションだった

ツカサは普段通り笑み

ジャックは最初は断っていたらしいがルナの命令なので・・・

ドーン！

ステージ中央から花火と共にミソラが現れる

黒のノースリーブに白いミニスカート、頭には小さなハットを被り、腕には所々白いリボン

胸に光るネックレスとブレスレットはスバルからの大切なプレゼント

「みんなー 元気ー!？」

ミソラは、満面の笑みで元気よくそのソプラノボイスを響き渡らせる

元気ー!!

観客はこれに答える

6人も大きな声で返す

「ジャック! あんたも大きな声で言いなさい!」

ルナはジャックの方を向く、その顔はまさに般若の顔だった

さつきまで あんなに輝かせていた目ではない

ビクッ

「は はい!」

き 聞こえてるのか・・・

恐ろしきはルナの耳、地獄耳だけではなく、声を聞きわけるところまで、できるとわ・・・

ルナは般若の顔からファンの顔へと戻る

「ミソラちゃん」

なんて熱狂的なファンとかしている

5人は たただだ思った 怖い っと

ライブは 中盤に差し掛かっていた

観客のボルテージも最高潮へと達する

「みんなー まだまだ いくよー!!」

ミソラ はノっていた、ファンのために、何より自分の大切な人との約束を守るために

・・・

「それでは 次の曲が最後です!!」

観客から えー という 残念そうな声がこぼれる

「えー、まだ聞きたいぜー」

ゴンタまでもが呟く

「ふふ、次の曲は新曲です！

私の大切な人に奉げます ” 共に歩む道 ”」

アップテンポだったリズムから一転、静かなゆっくりとした曲調へと変わった

独り泣いていた 弱さも見せずに

独り抱えていた 心に闇を

キミは手を差し伸べた

勇気を出して 歩み寄ってくれた

孤独だった 私を救いに

キミと肩を並べて 歩いて行きたいよ

もう 独りじゃない

キミがいるから

キミと歩んでいく

ミソラは目に涙を軽く溜めながら歌いきった

会場は息を引いて、聞き及んでいた

誰かが 拍手をした

拍車をかけたかのように伝染し、会場内は拍手に包まれた

いつまでも、その拍手は鳴り止まなかった

ライブも終わり、観客は帰路につく

「それにしても、最後の曲はなんというか…凄い思いの籠もった曲でしたね」

キザマロは感嘆し、ゴンタはうなづく

「そうね、でも、あれは星河君に対してでしょ」

納得するゴンタ、キザマロ

スバルは苦笑いしかできない

「さ、帰りましょう」

「あ、僕はミソラを待ってるから、ここだね！」

スバルは別れを済ますと関係者入り口の方へと向かった

「ホント、ラブラブだね、あの二人は！」

ツカサが笑う

「だな、けけ」

ジャックも笑う

ルナ は複雑な心境だったが、押し殺した

5人は帰路についた

数十分経っただろうか、関係者入り口に居た熱狂的なファンもさすがに姿を消し

その場には スバル しか居なかった

手を擦りあつて暖める

「うゝ 寒いなあ」

スバルは 手に息を吹きかけながら呟く

吐く息は白い

やがて、ミソラが出てきた

「うゝ 寒い・・・」

ミソラは身震いをする

「ミソラ！」

スバルはミソラに駆け寄る

「お疲れ様！」

「え、スバル 待っててくれたの？」

「当たり前だよ」

スバルは 笑いかける

「寒いのに待ってくれてありがとう」

「どういたしまして」

スバルはミソラの手を握って、歩き始める

暖かい手だった

「ライブ、楽しかった？」

ミソラは 恐る恐る聞く

「楽しかったよ！ 最後の曲は嬉しかったかな／＼」

「えへへ、 スバルのために作っただんだもん！」

ミソラはスバルの腕に抱きつく

二人は楽しそうに肩を並べて帰路についた

第21話 ライブ（後書き）

うーん・・・歌詞が・・・

話は変わりますが この小説の

1話1話は長いでしょうか？ 短いでしょうか？

よかったら 感想等で教えてもらえるとありがたいです！

第22話 クリスマスデート（前書き）

ちょっと長いかもしれませんが 区切りたくなかったので ご了承ください

第22話 クリスマスデート

「行って来まーす！」

晴れ渡った空の下、二人は家を出た

今日はクリスマス、前々から約束していたデートの日だ

スバルとミソラはウェーブライナーに乗り込む

行き先はベノサイドシティにある新しく作られた遊園地

変装用の帽子と伊達メガネをつけて、腕を組んで遊園地へと踏み出した

「うわー あ、スバルあれ乗ろう！」

ミソラは目を輝かせて、ジェットコースターを指差す

「え、いきなり…？」

顔色が青くなる

「早く、早く！」

ミソラに引つ張られ、ジェットコースターへと向かう

どうやら、このジェットコースターはこの遊園地の目玉らしい

なんでも20分 あるらしい、ますます顔が青くなるスバル

(2…20分だって!? うーやめたいな…)

チラッとミソラを見る

ミソラはもうスイッチが入っているらしく、ノリノリだった

(…腹をくくろう)

スバルは決意した、なんと言っても今日はデートなのだ

楽しもう！ 目の前の現実を無視するかのように、スバルは自分に言い聞かした

順番が周ってきた

ミソラはスバルを引っ張りながら、一番前の席へと座る

(な なんて 一番前なの…)

安全装置が降ろされる、スバルはミソラの手を握った

始まりを告げるベルの音、静かに動き始めるジェットコースター

やがて、最高到達地点まで達する

ふっと 重力がなくなる

「きゃ ああああああ」

「いやだあああああ」

叫び声が木霊する

右に左、時には一回転を繰り返す

楽しい者にしてみれば、あつという間の20分だが

スバルにとっては、とても長い20分だっただろう…

ミソラは上機嫌、スバルはグロッキーになっていた

ベンチへと腰を下す二人

「スバル、だいじょぶ？」

「う うん、なんとかね…」

血の気の引いた顔で笑顔を作るが、引きつっていた

「ご ごめんね、スバル…」

さすがに気を悪くしたミソラはスバルに謝る

「だいじょぶだよ、ほら！ そうだ、クレープでも食べようか」

スバルは ベンチから立って体を動かす

「ん、食べる！」

二人は 屋台へと向かった

「んー、チョコバナナもいいけど、マンゴーもいいなあ」

目移りしてしまう

「じゃあ、僕がマンゴーにするから、ミソラはチョコバナナにしよう、半分個しょ？」

「うん、そうする」

「すいませーん、チョコバナナとマンゴークレープ、一つずつ下さい」

勘定を済ませ、二人は意外と大きいクレープを頼張る

「んゝ 美味しい」

「ん、マンゴーも美味しいよ ミソラ」

スバルは マンゴークレープをミソラの前に出す

ミソラがパクつく

「んゝ、これも美味しい！」

二人は仲良く、お互いのクレープを食べあった

「美味しかった〜!」

ご満悦なミソラ、その頬についたクリームをスバルが指で取って舐める

さすがに恥ずかしかったのか顔を赤く染めるミソラ

無意識動作なのかスバルは気にもとめていない

軽く休憩をいれた後、ミソラはスバルを連れてお化け屋敷へと向かう

「え…、まさか、ここ入るの…?」

いかにもお化け屋敷だと言える外観、微かに聞こえる、悲鳴…

本日2度目の青い顔

「さ、行くよ スバル!」

「う…うん…」

我慢したのか、抵抗せずにミソラに連れられ中へと進む

薄暗い照明の中、二人は歩いていた。否、ミソラがスバルを連れていた

ガスが吹き出る仕掛けやいきなりお化けが出る仕掛け

スバルはその度にリアクションをとっていた

やっと見えた出口の光、だがそれはマテリアルウェーブによる幻

突如消えた出口、現れるお化け

スバルは走って逃げた、ミソラを置いて

「はあ… はあ…こ 怖かった…」

いやいやいや、何か忘れていないか？

「スーバールー？」

冷たい声音 ひやめ

ミソラはスバルの後ろに立つ

ビクッ

スバルは恐る恐る振り返る

ミソラは笑っていたが、目が笑っていなかった

「なんで私を置いていったのかなー？」

「え、あ、その…ごめん ミソラ」

スバルは慌てて謝る

「いいよ、別に… スバルが、私を置いて行っちゃただけだから」
言葉に棘を感じる

「ち 違うつてば、置いて行っただけではなく」

スバルは手をバタつかせる

「ふーん、そうなんだ、でも私は置いていかれたよ？」

（ま まずい… ソラがいじけてる）

「ふん！ もうスバルなんて知らない」

ミソラは ぷい っと背を向ける

しかし、そっぽを向いただけで、どこかへ行こうとはしなかった

背を向けるミソラをスバルは見つめる

構って と言わんばかりの存在感を見せつける ミソラ

スバルは哑然としたが、やがて穏やかな笑みを作る

そつと後ろから体を覆うように抱きつく

「ごめんね、ミソラ もう置いて行かないから」

「…ホント？」

「うん、約束する」

「じゃあ、許す」

ミソラはスバルの腕の中で、体勢を変えて正面を向くとスバルに抱きついた

「さ、遊ぼうか！」

「うん！」

二人はメリーゴーランドやコーヒークップ等、色々な物に乗って楽しんだ

いつしか、日は傾き、夕暮れ時だった

雪がふわりと舞い落ちる

普段は白い雪が、夕日に照らされ オレンジ色の雪 を降らしていた

「ミソラ、最後にさ、観覧車に乗らない？」

「うん、乗る！」

案内係の人に案内され、観覧車へと乗り込む

二人は向かい合って座っていた

日は沈み、深々と雪が降る、辺りに静けさが訪れる

スバルはミソラの横に移動する

観覧車が軽く揺れる

スバルはハンターからプレゼントを取り出す

「ミソラ、はい！クリスマスプレゼント！」

スバルは可愛くラッピングされた包みを手渡す

「うわ！ ありがとう、スバル、開けてもいい？」

「うん、いいよ」

ミソラは包みを開ける、中からピンク色のマフラーが出てきた

「可愛い！」

ミソラは喜んだ

ミソラもまたハンターからプレゼントを取り出す

「はい！ スバル！ クリスマスプレゼント！」

ミソラもスバルにプレゼントを手渡す

「ありがとう！ 開けてもいいかな？」

「うん！」

中からは青いマフラーが出てきた

「うわ！ マフラーだ！ ありがとう、ミソラ」

「丁寧に作ったつもりだから、綺麗だと思うけど……」

「え、これ、ミソラが作ったの？」

ミソラは コクリ と頷く

「ありがとう、ミソラ…… 大事にするね」

手にしたマフラーから伝わる、ミソラからの真心

ミソラからの贈り物は、今まで生きてきた中で一番嬉しいものだった

やがて観覧車が頂上に差し掛かった頃、二つの影が重なった

数秒後、名残惜しそうに二つの影は離れる

観覧車から降りる時、乗る前とは違って、二人の首にマフラーが巻かれていた

今日一日を遊び尽くした二人は帰路についた

「あー！」

「？ どうしたの、スバル？」

いきなり声を出すスバル

「言っの忘れてた！ ミソラ メリークリスマス！」

「あ！ うん！ メリークリスマス！」

二人は笑いあう

深々と降る雪の中を、首に巻いたピンクのマフラーと青いマフラーが二人を温めていた

第22話 クリスマスデート（後書き）

クリスマスデート編 終了です！

定番と言え、定番かもしれないです（笑
うーん あっけなかったかな？

第23話 ある日の日常

コダマ小学校は今は冬休み

スバル達にとつては、最後の冬休みとなるわけだが

だからと言って何かすることもなく、冬休みは半ばへと差し掛かっていた

「スバルー 起きなさい」

「ううー、もうちょっと…」

目は覚めているのだが、布団から出たくなかった

「うー 寒いなあ」

意を決して布団から這い出て、着替えるスバル

「おはよー」

食卓には既に、大吾とミソラが座っている

「「「おはよう」「」」

今日は日曜日なので、大吾も仕事が進みらしい

ミソラはやっとまとまった休みをもらったらしい

あかねが朝食を運んでくる

今日はトーストらしい

スバルは大吾の分のコーヒーも注ぐと自分の席に着いた

「はい」

コーヒーを手渡す

「お、ありがとう」

大吾 は受け取り 一口啜った

朝食を済まし、残っていたコーヒー飲み終えると

スバルは部屋へと上がった

宿題をするためだ

ミソラ もついてきたが

スバル が宿題をやっているため、暇だった

しょうがないので本棚の本を一冊手に取る

「宇宙の神秘」 ミソラは本の表紙を見ると、そのままその本を棚に戻した

クッションを抱き寄せて横になる

「スバルー 暇ー」

ついにミソラは我慢できず、スバルに話かける

「え、暇って言われてもな… なんかする？」

スバルは取り組んでいた問題を終わらすと、ペンを挟み込んで閉じた

「おしゃべりしょ！」

「ん、いいよ」

スバルは椅子から降りて、ミソラの横に座る

・・・

クリスマスデート以来、ミソラは何かと忙しく

年越しすら家で過ごせていなかった

長い間、話していたのだろうか

もう昼になっていた

窓から射す光が、どこかポカポカとした気持ちにさせる

スバルは欠伸をする つられてミソラもする

ふふ 二人は笑う

「欠伸移った！」

「だね！」

スバルは伸びを一つすると

ミソラの横に寝転がる

「んゝ 暖かいねえ」

「だねえゝ」

目がトロンとしてくる

やがて、二人は静かに寝息をたてて寝始めた

ウォーロックが気をきかして、タオルケットを二人にかけると

自分もスリープモードへと入った

「スバルー」

あかね がスバルの部屋へと入ってきた

「あら？」

部屋の中央で寝ている二人が目に入る

「ホントにいつも一緒ね」

あかねは柔らかな笑みをつくり、リビングへと戻った

どのくらい寝たのだろうか、窓から見える景色はオレンジ色に染まっていた

スバルは起きようとするが起きれない

ミソラがスバルの手を巻き込んで寝ているのだから

スバルは少し考えたが、何かやらなくちゃいけない事もないので

ミソラが起きるまで横にいる事にした

もうすぐ、卒業だなあ　なんて事を考えていると

ミソラが目を擦りながら起きだした

…寝ぼけているのか、ミソラはスバルの顔を見ると抱き着いて、また寝てしまった

「え、ちよつとミソラ!」

さっきよりも動けない状況になっていた

スバルはミソラが落ちないように背中の手を回して支える

ガチャ

「スバルー ミソラー そろそろ起きなさい」

あかね はスバルの部屋へと入る

「あらー 起きて早々何してるのかしら？」

あかね は楽しそう

「え、あ、いや、これはミソラが…」

「あら、ミソラが勝手に抱きついただけで、スバルは嫌なのね？」

いじわるモード全開のあかね

「…嫌ではないです」

スバルは反論するのをやめた

「じゃ、ミソラを起こして、下にきなさい、ご飯食べるよ」

あかね は本来の用事を済ませ、下へ降りて行った

「ミソラ、ほら起きて」

自分に抱き着いているミソラを揺らしながら起こす

んー？ やつとミソラが起き始める、が

なぜ スバルが目の前にいる？ いやいや、なんで抱きかかえられている？

ミソラは慌てて、スバルから離れる

「なんで私、スバルに抱き着いてたの!？」

顔を赤くする、自分の意識がある時は抱き着いても平気なのに
寝ていた時だとさすがに恥ずかしいのだろう

「ミソラが寝ぼけて抱き着いてきたんでしょ！」

スバルは 体の自由 をやっと得た

「つと、ご飯だつてさ」

「あ、うん」

二人は 夕食を食べに降りた

待ちつけていたのは、言うまでもなくあかねと大吾の質問の嵐だった

スバルよりもミソラの方が、顔が赤かったのは言うまでもない

こうして今日も一日が過ぎていった

第23話 ある日の日常（後書き）

今回は 特に何も無い 日常を書いてみました

く番外く ドラマ撮影編（前書き）

前に書いていた通り 今回は ドラマ撮影編 です

く番外く ドラマ撮影編

「スバル君、起きて！ ほら、仕事遅れちゃうよ？」

ミソラはスバルを揺すって起こそうとするが、スバルはなかなか起きない

『そんなで起きたら、俺も苦労しねーよ』

『あら、どうゆうことかしら？』

ウォーロックに発言にハープが興味を示す

『つまりだ、俺はずーっと朝、スバルを起こしているが

その程度でスバルが起きた試しがねーってことだ』

『そんなにスバル君は朝が弱いよね…』

ハープはスバルに視線をおくると妙に納得する

「でも、起こさなきゃ！ スバル君！」

もうちょっと、なんて言っただけで布団を被ろうとするスバル

「もう、スバル！ 起きなさい！」

「え？ あ！」

スバルが跳ね起きる

『な!?!』

ウォーロックは啞然とする

「やっと起きた! ほら、早くご飯食べて、仕事に行くよ」

ミソラに催促され、着替えてリビングへと向かった

朝食を済まし、展望台へと向かった

どうやら今回のドラマはコダマタウンで行うらしい

なんでも、一人の女の子と男の子の出会い をモチーフにしているらしい

「「おはようございます!」「」

元氣よく二人は挨拶をする

ミソラは慣れたものだったが、スバルはやや緊張している

読み込んでおいた台本を眺め、自分の出番を待つ

と言っても、ほとんど、スバルとミソラは呼ばれっぱなしなのだが

ミソラはスバルの知っている普段とは違って（スバルだけなのだが）

女優だった

（うわゝ 凄いなあミソラちゃん）

カメラの前で、女優を演じるミソラにスバルは感心していた

（よし！ 僕も頑張ろう！）

自分にそう言い聞かして、初めての撮影に挑んだ

・・・

「はい カット！ いいね！ スバル君！！」

「え、あ、ありがとうございます！」

監督からの賞賛に、驚いたがスバルは頭を下げる

「スバル君、初めてなのに凄いな！」

ミソラまでもスバルを誉めるのだから、スバルは顔が赤くなっていた

「じゃあ、今日の撮影はこれで終わります

明日は朝6時からの撮影なので、よろしくお願いします」

（ろ 6時・・・）

「はい、わかりました」

「は はい…」

(6時は ちょっとキツイかな…)

二人は帰路に着く

道中、スバルは立ち止まる

「ミソラちゃん」

「うん？ 何かな？」

スバルに呼び止められ、ミソラも立ち止まる

「あのさ…」

スバルは真剣な表情でミソラを見る

「明日、朝起こしてもらっていいかな!？」

一変、真剣な表情は崩れて、半泣き状態だった

「僕、多分起きれないから… 願い!」

「ぷっ あははは」

ミソラは大笑いしている

何事かとスバルはミソラを見つめる

「ははは… あー… 可笑的い」

「！？ ミソラちゃん、僕は真剣なんだよ？」

スバルは むつとした顔だった

「ごめんね、でも、真剣な顔だったから、何かと思ったら 朝起こして ってさ」

ミソラは笑いすぎて出た、涙を拭う

「うっ… 酷いや…」

「ちゃんと起こすから、安心してよ」

「ホント？」

「うん、なんなら毎日起こしてあげるから」

「え 毎日…？」

「うん！」

ミソラは歩き始める

（うーん、毎日かぁ…）

結果オーライと言っべきなのだろうか？

スバルはミソラを追いかけて走った

こうして、時には朝早くから夜遅くまで続く撮影に徐々に慣れていた

記念すべき、スバルの初NGは何を隠そう

ミソラの事を ミソラ っと呼ぶシーンを ミソラちゃん と呼んだ事だった

いくら台本が頭に入っていようが、その台詞を言うのに抵抗があったのか

はたまた素で ちゃん 付けをしてしまったのか

それは、スバルにしか分からなかった。否、スバル自身も分かっていたなかった

実はこのドラマの役名はそのまま 響ミソラ と 星河スバル として使われている

演技でスバルは、ミソラの事を ミソラ と呼ぶためか

いつの間にか、スバルは、ミソラにちゃん付けをしなくなっていた

ミソラも然り、スバルに対して君付けをやめていた

こうして、二人の仲は急速に深まっていった

く番外く ドラマ撮影編（後書き）

感想等よかったらお願いします

第24話 卒業（前書き）

今回はちょっと短いです

第24話 卒業

真新しい学生服に身を包み

スバルはリビングへと降りた

「お、スバル 中々似合っているぞ」

大吾は笑って スバルの頭に手をのせる

「へへ、 あ！ ミソラ どうかな？」

スバルはミソラの方を向き、学生服姿を見せる

「似合ってるよ！」

とびっきりの笑顔をスバルにおくる

ミソラは本来ならば、スバルと同じ卒業する立場の人間なのだが

如何せん、仕事があるため通信教育をしている

そのため、卒業式には出れないのである

しかし、ミソラはスバルの晴れ舞台を見るために、仕事の休みを取り

あかねと大吾と共に、見に行くという事になっていた

「ありがとう！ じゃ、先に行ってるね！」

スバルはルナ達と共に学校へと向かった

今日はスバル達の卒業式

また新たに、この学校を巣立っていく生徒を、校長は玄関で出迎えた

「「「「「おはようございます!」「」「」「」

スバル、ルナ、ゴンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックは 元気よく
校長に挨拶をする

「ああ、おはよう!」

スバル達は 賑やかな声のする教室へと向かう

小学生生活最後のベルが鳴る

ガラ

先生が教室へと入ってきた

手には 出席簿 と 卒業おめでとう と書かれた花 を持って

最後の出席の確認を取り終え、全員の顔を一度見る

その顔は とても穏やかだった

スバル達は一人一人 花を 制服へとつける

やがて、時間となり、体育館へと入場する

一人一人卒業証書を受け取り、それを両親へと手渡す

スバルもまた、あかねと大吾そしてミソラの元へ行き、卒業証書を手渡す

あかねは目を赤くしながら、口にハンカチを当てて、ただ一言

「おめでとう」と口にした

大吾 は 息子の成長した姿 に頷く

ミソラもあかね同様目を赤くしていたが、心からスバルを祝福した

「へへっ
」

スバルは にこやかに笑う

6年の思い出を胸に抱いて （スバルにとっては2年だが）

コダマ小学校を巣立って行った

桜咲き、卒業を迎える生徒を祝うかのように

風が桜の木を揺らし、花びらを舞い上げた

第25話 花見

今年の桜も綺麗に咲き誇っていた

今日は、星河一家で某所に花見に来ていた

何年もこれなかった花見をしに、新しい家族であるミソラを加えて

ウォーロックとハープは場所取りに朝からいるはずなのだが…

スバル達は ウォーロックとハープを探す

『大吾ー ここだぞ 』

「お！ 随分良い所を取ったな！」

一本の桜の大木が咲き誇る場所だった

大吾がニヤッと笑って、ウォーロックに親指を立てる

『っへ、こんなもん朝飯前だぜ！』

ウォーロックは調子にのる

『ポロロン、よく言うわね

あんたは寝ていただけじゃないの』

ハープがジト目で真相をばらす

『うぐ…』

さすがのウォーロックも黙る

一時の沈黙…

沈黙を破ったのは ミソラだった

「それにしても、凄い綺麗だねえ」

ミソラは 桜の大木を見上げる

時折吹く風が、桜の花びらを揺らし舞い落ちてきた

ミソラは手のひらで桜の花びらを掴んだ

「さ、お弁当を食べましょうか！」

あかねは 重箱を取り出し、開く、中からは

三色おにぎりやからあげ、野菜の和え物等バランスのいいおかずが出てきた

「「うわぁ 美味しそう！」」

スバルとミソラは目を輝かせる

「じゃ、頂こうか！」

「「うん」」

「「「いただきます！」」」

絶品だった

スバルはからあげを頬張り、ミソラもまたおにぎりを頬張っていた

「「んー 美味しいー」」

「ふふ、よかったわ」

あかねはニコつと笑うと、おにぎりを一口食べた

大吾は片手にビールを持ち、桜の風景と今ある家族の風景を見ていた

スバルが喉に物を詰まらせ、胸をドンドン叩いてる

ミソラは慌ててスバルに飲み物を渡す

あかねはあらあらと口に手を当てて微笑む、そんな風景を

大吾は思う 帰ってこれて良かったな っと

（おっと、俺らしくないな）

大吾は手にしたビールを一口呷った

結構な量があったはずの重箱は空になっていた

ミソラが　ぺろりと食べた　おかげだが

あかねは　重箱をしまうと　足を伸ばして大吾の横に座る

「んー　今日はいい天気ね」

「ああ、そうだな」

青空に所々白い雲が浮かんでいた

「スバル、ちょっと歩かない？」

「ん、いいよ」

スバルとミソラは立ち上がり、桜並木を歩き始めた

風が花びらを飛ばしながら、吹き抜ける

「んー　気持ちいいね」

ミソラは伸びをしながら、スバルの手を握る

「ぽかぽかしてて、気持ちいいね」

スバルは手を握り返す

少し歩いた頃だろうか

あ、ミソラちゃんだ！

ミソラがファンの子に見つかってしまった

今日は 家族で花見 だったので、変装などしていなかったかせいか
次々と人が集まってきていた

「もどろつか、ミソラ」

「うん！」

スバルとミソラはファンに囲まれてしまう前に逃げる事にした

追いかけてくるファンの子達から逃れ、二人は大吾とあかねの所へ
と戻った

「いやー 危なかったね」

「ふふ、ごめんね」

ミソラはぺろっと舌をだして 笑う

言わずもがな スバルは見惚れていた

・・・

「スバル、ミソラに見惚れてるでしょ？」

「！ー！」

「え、あ、いや…」

あかねに核心をつかれる

慌てるスバルをミソラが見つめる

「はい、見惚れてました…」

スバルは 自白する

「えへへ、そうなんだ」

ミソラは満面の笑みでスバルに近寄って 抱きつく

「ありがと、でも私はスバルだけのだよ？」

耳元でそつと呟く

スバルは一気に顔が赤くなる

「ちょ、ミソラノ」

ミソラはスバルから 離れる

「えへへ」

ほんのり頬を赤くしながら 笑う

あかね と 大吾は微笑ましく見ている

どんどん顔が熱くなっていくのを感じるスバル

恥ずかしさに耐えかねて か

「と トイレに行つて来るね」

スバルは立ち上がって、トイレへと早足で向かった

「ふふ、スバルもまだまだね」

「ああ、所でミソラ、さっきは何を言ったんだ？」

「内緒！」

口に指を当てて 笑う

「はっはっは、内緒か、 ミソラ スバルをよろしく頼むな」

「うん！」

話は当の本人を際し置いて進んでいた

程無くして、スバルが戻ってきた

ニヤつくあかねと大吾を見て瞬時に悟る

何かあったな っと

ミソラは先ほどよりもさらに上機嫌

「何かあったの？」

「なんもないよ」

絶対何かあったなと思ったが、まあ　いいか　と気にするのをやめた

家族4人で　桜を見ながら、たくさんの事を話した

やがて日も傾き、夕暮れ時となる

夕日に照らされる桜もまた美しかった

「来年もまたこようね！」

ミソラが言った

「うん！　そうだね」

来年も花見に来る約束をして、スバル達は　帰路に着いた

来年もそのまた来年も、スバルと一緒に来れるように　と

桜　桜よ

誰が為に　咲き誇る

誰の為でもない

ただ　想いを花にし　咲き誇る

第25話 花見（後書き）

今回は 花見 にしてみました
なんか 文章がおかしいような気がします・
よかったら 感想お願いします

それと来週テストがあるため 投稿が遅れます！

第26話 中学校

「行つてきまーす」

元気よく挨拶をして、家を出て行く

あかねと大吾は、二人を見送った

今日から、スバルとミソラは中学生

ミソラもスバルと同じ学校に通うことになっていた

なんで同じ中学校かと言うと

理由は簡単だ 「スバルと一緒に居たいから」 だそうだ

ミソラは、小学校へと通わず、通信教育で勉強をし

アイドルとしての仕事をこなしてきていたが

中学へは、キチンと通う事にしたらしい

勿論、仕事はやめずに、学業との両立を図るつもりらしい

そうそう、スバルも、どうやらミソラと一緒に仕事をするらしい

ま、仕事と言っても、バラエティー番組やらに

ミソラとセットで呼ばれたりするだけなのだが

二人は、制服を着ているせいか、はたまた、中学生になったという期待からか

とても、新鮮な気持ちだった

スバル達が通う事になるコダマ中学校は、コダマ小学校からたいして離れていない為、そこまで、新鮮味はないのだが…

1クラス24人で、組みは1〜5組までであるらしい

玄関に掲示されている、クラス表には

1組に ルナとジャック

3組に ゴンタとキザマロ

5組に スバル ツカサ ミソラ という風になっていた

「あ！ スバルと一緒にだ！」

「だね！ ツカサ君もいるよ」

「やっぱり、ジャックは、ルナちゃんと一緒だったんだ」

ミソラは笑っている

「え？　どゆこと？」

「ふふ　内緒だよ！」

スバルには、何の事かわからない

やっぱり、鈍いな　なんて思っているミソラだった

5組には、スバルの知らない生徒がたくさん居た

いや、スバルの事を知っている生徒は、たくさんいるのだが

既に、ミソラは、ファンの子達に囲まれている

愛想良くサインなんかを書いたり、握手したりしている

「スバル君」

「ん、ツカサ君！」

「また、同じくクラスだね！」

「うん、よろしくね！」

スバルはツカサと握手する

その頃の1組では…

（とほほ… また委員長と同じクラスだ）

ジャックが泣いていた

「ジャック！ また、あなたと同じクラスね」

「そーみてーだな…」

「何かしら？ どこか不満があるのかしら？」

一瞬出た黒いオーラを感じ取ってか

「そんなわけねーよ、 そんなわけ…」

「ふん！ それにしても、星河君とミソラちゃんが同じクラスだねて…」

やっぱり、ルナは機嫌が悪かった

- 3組 -

「やっぱり、一緒でしたね」

「みたいだな」

背の順で並ばされたら、間違えなく一番前であろう身長の子ザマロと

縦においても横においても、たぶん一番だと思われるゴンタの二人は
委員長の居ないクラスに安心感を感じつつも、寂しかった

「委員長がいないと、教室ってこんなに静かなんだな」

ゴンタが静かな教室を見て、呟く

「ですね、やっぱり、委員長は凄いです」

「だな！」

改めて、ルナの凄さを知った二人だった

第26話 中学校（後書き）

ご指摘を頂けたので改善してみました
少しずつ、他の話も直していきたいと思います

感想・評価 改善点 等 よかったらお願いします

第27話 担任は…（前書き）

どうも、お久しぶりです

やっとテストも終わりました！

勉強中、色々と話もネタもできたので、これから投稿頑張ります
応援よろしくお願いします！

第27話 担任は…

ガラ

見覚えのある黒い髪の女性の先生が入ってきた

「おはようございます」

体は細く、髪は腰程まである長い黒髪で大人っぽさのある人だった

「ク、クインティア先生!？」

スバルは驚く

「ふふ、久しぶりね。改めて自己紹介をするわ

これから1年間、あなた達の担任を勤める事になった、クインティアです

どうぞ、よろしくね」

それから、スバル達はそれぞれ黒板に名前を書き

自己紹介を済ませた

余談だが、スバルとミソラの自己紹介の時だけ、やたらと質問が多くクインティアが止めに入る程だったという

今日は入学式だけなので、学校自体は早く終わった

「ジャック！ どうしてクインティア先生が担任だって事教えてくれなかったの！」

帰り道、スバルはジャックに聞いた

「ねえちゃんが言うなって言ってたんだよ」

「え、なんでまた」

「はあ… 暁の悪い癖が移ったんじゃないか」

ジャックは憂鬱そうな顔になった

「ってことは、クインティア先生、暁さんと一緒に暮らしてるの？」

ミソラが嬉しそうに聞いてくる

「ああ、一緒に暮らしてるよ、俺はなんか肩身が狭いけどな」

最後の一言はなにか切実な意味が籠められていた

「そうなんだ、いいな」

「いいなってミソラちゃんは、もうスバル君と一緒に暮らしてるじゃん」

ツカサはつつこむ

「そうだけど、二人暮しっていいなって」

ミソラはスバルの腕に抱きつく

スバルは苦笑いだった

「二人暮しじゃなくて、俺もいるんだけどな…」

ジャックは寂しそうに呟いた

なんとも言い難い空気が流れた…

「それじゃ、みんな、また明日！」

道の十字路で、みんなと別れた

「それにしても、クインティア先生が担任だなんて、びっくりしたね」

「うん、びっくりした！ それに暁さんと一緒に暮らしてるなんてね！」

「いや、あの二人は大人だからね」

そうこう話している内に家へと着いた

二人はあかねに、ミソラと同じクラスだった事

担任がクインティア先生だった事を話した

「あら、二人とも同じクラスで良かったわね」

あかねは微笑む

「うん！」

ミソラは嬉しくなってスバルに抱きつく

「ミソラ、家とかならないけど

学校ではあんまり抱きつかないでね」

「えー どうしてー」

ミソラはスバルから離れて、目を見る

「周りの人に何か言われるの嫌だからだよ」

「いいじゃん、今更！」

「よくない！ 学校では抱きつかない事！ いい？分かった？」

ミソラはスバルにビシっと言われる

うゝ 頬を膨らまして膨れっ面を作るミソラ

膨れっ面を作るミソラは可愛らしかった

ファンの子が見れば、それだけでテンションが上がりまくってしまう事だろう

しかし、スバルは強かった

「そんな顔してもダメ!」

「ケチー」

「ケチじゃないでしょ! まったく、もう…」

こんなやり取りが30分くらい続き、渋々ミソラが了解したのであった

第27話 担任は…（後書き）

クインティア出しちゃいました！
もしかしたら、クインティアと暁の番外編作るかもです

第28話 嫌な予感

キンコンカンコン

授業の終わりを告げる予鈴が鳴る

うーん

ミソラは伸びをした

ミソラが伸びをしている姿を見て、複数の男子が歓喜の声をあげる

「スバル、お弁当食べよ」

笑顔で隣に座っているスバルを見てお弁当を取り出す

「ん、食べよっか」

スバルとミソラは机をくつつけて、お弁当を広げる

お弁当はあかねの手作りだ

楽しそうに会話をしながら食べる風景は、女子にとっては冷かしの対象であり

男子にとっては、嫉妬の対象となるだろう

それほどまでに、この二人はお似合いなのである

「スバル君、僕も混ぜてもらっていいかな？」

ツカサが手にパンをもって二人の所へやってきた

「うん、いいよ」

ツカサを混ぜて、三人で昼食を食べた後、他愛もない会話をした

昼休みが半ほどまで終わった頃、ミソラやスバルを目当てとした生徒が

5組には押し寄せてくる

ミソラは慣れた手つきでサインを書く

スバルも大分慣れたが、ぎこちなさがあった

勿論、ツカサは二人を見比べて、クスクスと笑っていた

「ミソラちゃん、今日ちょっと話があるんだけど放課後いいかな？」

銀髪で身長が高く、そして顔立ちの整った男子が周りに聞こえないように囁いた

「え」

「じゃ、放課後中庭で待ってるね」

銀髪の男子はそう告げると立ち去った

（行かないと行けないのかな…）

ミソラはスバルをちらつと見たが、スバルは握手を迫られていた

ミソラは心に靄^{もや}が、掛かったかのような気分だった

その後の授業も、ミソラは身が入っていなかった

- 放課後 -

「さ、帰ろっか」

スバルは鞆に勉強道具を詰めて、ミソラに促す

「あ、ごめん… ちょっと用事があるから、先帰ってもいいよ？」

ミソラは笑顔を作るが、自分でも笑顔になっているか不安だった

「ん、じゃ先に帰ってるよ？」

「うん、私も用事済ましたら、すぐ帰るから」

ミソラはそう告げると鞆を持って教室を出た

「なんか、ミソラ変だな」

スバルは、首を傾げる

「さっきの笑顔をも、無理やり作った笑顔みたいだったし…」

『知りたいか？スバル』

ウォーロックがウィザードオンしてきた

「知りたいかって、ロックは何か知ってるの？」

『実はだな…』

ウォーロックは昼休みにあった、銀髪の男子とのやり取りを話した

「え…、そんな事あったの？」

『おう、あったぞ、さっきハーブとも話したが、お前も行った方がいいんじゃないか？』

「…、ロック！ 中庭だったよね？」

『ああ』

スバルは鞆を放置して走りだした

第28話 嫌な予感（後書き）

さあ、銀髪の男子は何の為にミソラを呼び出したのでしょうか！？
今後の展開に期待あれ！

第29話 ヒーロー

コダマ中学校の中庭は、本物の木が植えられており

ベンチがあちこちに設置されていた

ミソラは言われた通りに、放課後、中庭へとやってきた

スバルに対し、何か悪い気持ちを抱えながら

「やあ、来てくれたんだ」

後ろから声がする

ミソラは振り向く、銀髪の少し長めの髪型で、身長は高く

顔立ちの整った男子が立っていた

「何の用事ですか？」

ミソラは用件をさつさと済ませたかった

「まあまあ、そんなに慌てないで…、まずは自己紹介をさせてよ

僕は 神崎 キョウ、学年はミソラちゃんと同じ1年生だよ」

爽やかな笑顔をおくる、大概の女子なら、この笑顔でイチコロものだろう

「…で、神崎君は何の用事で私を呼んだのかな？」

ミソラには、効いていなかったが…

「じゃあ、担当直入に言うね”僕と付き合ってよ”」

「無理」

ミソラは即答する

「私には、大切な人が居るし、それに今一番幸せだから」

「大切な人って星河 スバル か」

「そうよ！」

爽やかな笑顔から、一変、苛立ちを籠めた顔つきになった

「君には相応しくない！ 君に相応しいのは僕だ！」

声を荒げてキョウはミソラに歩み寄り、腕を掴む

「つつ！ 痛いから離して」

ミソラは手を離そうとするが、逆に力を籠めれてしまった

「嫌！ 離して！」

ミソラは涙目になっていた

（スバル！！）

心の中で愛しい人の名を叫ぶ

刹那

「ミソラから手を離せ！」

怒りに満ちた声を荒げて、スバルはキョウからミソラを引き離す

キョウとの間に2、3 m程の距離ができた

「スバル！」

ミソラはスバルに抱きつく

「だいじょぶ？ミソラ」

「怖かったよう」

スバルはミソラの頭を撫でる

「ごめんね、僕がもっと早く来てれば…」

ミソラは頭を左右に振って

「ちゃんと、助けてくれたよ」

作り笑いなんかじゃない、とびっきりの笑顔をスバルおくった

「星河 スバル」

キョウは呟く

スバルもまた、ミソラの方からキョウの方へと向き直る

「もう、ミソラに近づくな」

怒りに満ちた、低い声で淡々と告げる

見るものが見れば、足が竦^{すく}みそうだった

「っ！、ここは一旦出なおよ、でも僕はミソラちゃんをあきらめないからな」

キョウはそう言い放つと立ち去った

「ふー、もうだいじょだよ」

いつも通りの声音でスバルはミソラの方を向く

「スバル、なんでここが分かったの？」

「ん、ロックが教えてくれたんだ、それに…」

ヒーローはピンチには必ず駆けつけるでしょ？」

スバルは少し赤くなった頬を指で搔いた

ミソラは妙に納得していた

あの時、心の中でスバルの名を叫んだ

叫んだ瞬間、スバルは現れてミソラを助けてくれたのだ

スバルは恥ずかしがっているが、まさにヒーローだった

「ありがとう」

「どういたしまして」

スバルもまた笑顔を返した

『っけ、何がヒーローだったっつの』

お前さつき、慌てすぎて階段でこけただろーが』

ウォーロックが笑いながら出てきた

『ロック！！！』

『うげ』

『あんたは、どうしてこんなにもKYなのよ！この馬鹿！』

ハープが出てきて、ウォーロックにパンチを食らわす

「スバル、こけたの？」

「ははは…、面目ない…」

「そんなに、急いでくれたんだ」

「そりゃそうでしょ！」

「えへへ」

ミソラはスバルに抱きついた

「さて、帰ろっか」

「うん！」

スバルの鞆を取りに一度教室へと戻り、二人は手を繋いで帰路についた

第29話 ヒーロー（後書き）

オリキャラ登場です

性格は自己中心的なタイプの人間です

ちなみに、ミソラが腕を掴まれていた時にハーブが出てこなかった
訳は

ウォーロックと話をしていたためと周波数が近づいているのが分かってたからです

補足説明無しでもいいけるように、精進します

第30話 家にて…

「お母さん、聞いて、聞いて！」

ミソラは家に着くなり、あかねの元へ急ぎ足で向かった

「何かあったの？」

あかねはミソラの笑顔とスバルの顔が赤くなっているのを見て

はーん っと何かを確信した

「あのね…」

ミソラは説明した

いきなり告白を迫られて危ない状況になった事、スバルが現れて助けてくれた事

「あらあら、そんな事があったの…、それでミソラはだいじょぶなの？」

あかねは事情を聞き、スバルもなかなかやるなっと思いつつも、ミソラを心配した

「うん、だいじょぶだよ！」

ミソラは笑顔で答える、人を明るくさせる笑顔だ

「そう、今度からは必ず、スバルと行動しなさいね？分かった？」

あかねは、だいじょぶだろう　とは思ったが念をおす

「分かった、スバルとずっと一緒に居る事にする！」

「スバルもミソラを一人にしちゃダメよ？分かった？」

「うん、ミソラの傍にずっと居るよ」

スバルは今まで、極力学校ではミソラと居る事を控えていたが今回の事で反省した

スバルの言葉を聞いて、ミソラはさらに上機嫌になった

「えへへ」

スバルの腕に抱き着いて、顔を埋める

「ずっと、一緒に居てね！」

「うん、居れる時はずっと一緒にいるよ」

（それにしても、あいつは…）

スバルはミソラに迫った男子の事を考えていた

自分の中にあんなに人に対して怒る自分がある

いや、ミソラの為にか

今、隣にいる大切な人を必ず守ろうと硬く誓った

「スバル？」

考え事をしているのか、真剣な顔つきのスバルを見て

ミソラは声をかける

「ん、なに？」

ニコツとした笑顔でミソラを見る

「いや、なんでもない」

「？ 変なの」

スバルは笑った

やがて大吾が帰ってきて、みんなで夕食を食べた

先程の話を大吾にもしたら、大吾もまたミソラを心配した

ミソラは スバルが居るからだいじょうぶ と言って笑った

そうか っと大吾は納得したがスバルに しっかりミソラを守れ
っとただ一言を告げた

それ以上を大吾は何も言わなかった

第31話 小テスト（前書き）

もう一つ投稿です

第31話 小テスト

あの一騒動から一週間が経った

あれからスバルは常にミソラの傍に居た

周りから冷やかしを受けた事もあった、男子から嫉妬の視線も受けたが、物ともせずスバルはミソラの傍で笑っていた

勿論、仲の良いツカサヤルナ、ゴンタ、キザマロ、ジャックは理解してくれている

スバルはそれだけで良かった

「はい、それでは小テストを始めるわ」

数学教師であるクインティアが小テストのプリントを配り始める

えー…マジかよ クラス中から溜息が漏れる

- 15分後 -

「スバルできた？」

ミソラは隣の席にいるスバルに聞く

「あ、うん 多分出来たと思うけど」

「私、一問分かんなかったな」

スバルとミソラは以外と頭が良い

スバルが毎日コツコツ勉強しているおかげか

それに付き合っミソラも勉強をするようになったからである

中学生になって初めての前期中間考査まであと2週間

スバルは結構楽しみにしていた

「小テストはSHRの時間に返すわ、それでは教科書22Pを開けて…」

クインティアは授業を進める

クインティア先生の授業はとても分かりやすく、人気のある先生なのである

数学を楽しいと思える生徒が結構いるのは、多分先生のおかげだろう

- S H R -

「数学の小テストを返却します、順番に取りに来て下さい」

スバルは小テストを受け取る、点数は… 100点だった

「スバル、何点…?」

スバルは100点の小テストをミソラに見せる

「うわ、満点じゃん！ 私95点だったよ」

ミソラは自分の小テストを見せる

答案部分には赤ペンで解答方が細かく書かれていた

クインティアは定期的に小テストを行っては

間違った部分を細かく説明して返却してくれ為

結果、同じミスを繰り返さないようになる

これも人気の一つだろう

ディーラーに居た頃と違って生き生きしてるなとスバルは思った

「中間考査まであと2週間です、計画的に勉強する事。それではまた明日」

《さよなら》

「みんな、ちゃんと勉強してるかしら？」

「うん、してるよ！ ね？ミソラ」

スバルはミソラにも同意を求める

「うん！」

「当たり前ですよ、委員長！」

メガネをくいつと上げてキザマロが言う

「僕もだいじょぶだよ」

ツカサは笑う

「俺は勉強しないと怖い…」

ジャックは怯える

怖い…？ クインティア先生が？まさかね

ジャック以外の6人は思った

「…で、ゴンタは？」

ギクッ

肩を震わせる

「まさか、勉強してないわけ？」

「いや、してるぜ？」

汗をかきながら、ゴンタは答える

目が泳いでいる

「はあ、まだ2週間前だからだいじょぶだろうけど…」

ルナは溜息をする

「キザマロ、今回は私とあなたで交互にゴンタに教えましょ」

「分かりました！ それでは早速、ゴンタ君勉強しますよ」

「え、今日からかよ」

「今日からです！」

「ちえっ 分かったよ」

ゴンタはキザマロに連れられて帰って行った

「それじゃ、みんなまた明日ね」

別れを済まし、二人は家へと帰った

ミソラは数学の間違った部分をやり直し

スバルは他の教科を勉強した

第31話 小テスト（後書き）

感想等良かったらお願いします！

第32話 新たな予感（前書き）

2 3 話程、ルナとジャック視点の話です

第32話 新たな予感

前期中間考査が1週間後に迫った、ある日の帰り道

いつものメンバーで帰っていたが、ジャックだけがどうにも元気がなかった

スバルとミソラは手を繋いで歩いている

キザマロとゴンタは見慣れた事なのだが

羨ましいなあ…と嫉妬心を抱いていた

ツカサは片やラブラブの二人と片やその二人に嫉妬する二人を見て笑っていた

ルナだけがジャックの異変に気付く

「ジャック、あなたはさっきからどうしたと言っの?」

「いや、別に…」

ジャックは素っ気無く返す

「嘘おっしやい、ほら、話なさい」

普段通りの命令口調でルナはジャックに喋らせようとする

「…実はな、毎日毎日ねえちゃんが勉強を無理強いするから

疲れて家に帰るのが嫌なんだよ

それに、今ねえちゃんのやつ、暁と喧嘩してるから尚更な…」

ジャックは溜息を漏らす

まったく、喧嘩するのはいいけど、とばっちりで俺まで大変な目に…

「あら、そんな事？」

「そんな事って俺には一大事なんだよ…」

ルナの発言に食って掛かろうとするが、そんな元気もなかった

はあ… また溜息が漏れる

「ジャック、それなら私の家にいらっしやい、部屋なら余ってるわよ？」

「へ？嫌、それは色々とまずいだろう…」

ジャックは一瞬考えたが、ルナの家 of 迷惑になる事

ましてや男が女の子の家に泊まるのまずいだろうと考えたからだ

「何がまずいのかしら？」

「いや、何ってそりゃ、お年頃の男子が女子の家に泊まりに行くのはな…」

ルナは黙って、スバルとミソラを指差す

成る程、確かにあの二人は同じ部屋で同じベットで寝ているが

それは二人が恋人だからの話だろう

「さ、いらっしやい。ジャック」

ルナはスバル達に別れを済ますとジャックを連れて家へと帰った

ルナの家は高層マンションだ

そしてなにより高級だ

ルナはジャックを連れて家へと入った

なんだこの広さは？

ジャックはその広さに呆気をとられる

「ほら、早く入って！ 玄関で立ち止まらないで」

ルナに言われて初めて気付く、ここは玄関なのだ

金持ちってすげーな と改めて思った

「あ、お父様とお母様が帰ってきているわ」

ルナは玄関にある靴を見ると、目を輝かせる

リビングの戸を開ける

「お帰り、ルナ」

「ただいま、お父様、お母様」

制服に身を包んだ、ルナの両親　白金　ナルオとユリ子が出た

「む、その子は友達かな？」

ナルオはジャックを見るとルナに尋ねる

「ええ、ちょっと事情があつてジャックを家に住ませたいのですが……」

「部屋なら余つてゐるから、別に構わないよ」

ジャック君だったね？自分の家だと思つて生活して構わないよ」

ニコツと笑う

「は、はい」

思わず敬語になつてしまつた

ルナは鞆を置いてくると言つて部屋へと向かつた

「ジャック君、君はルナにとって大切な友達なのだろう。」

私達は仕事が忙しくて、ルナと一緒にいる時間がとても短い

良かったら、これからもルナの友達として、あの子を支えてもらってもいいだろうか？」

ナルオとユリ子はルナの事を案じ、ジャックに胸の内を明ける

「委員長、いや…、ルナにはいつも俺の方が支えてもらってます
こんな俺なんかでいいんだったら、俺はルナを支えて行きたいと思っています」

ジャックは答える

「ありがとう、ジャック君。おっとそろそろ仕事か」

ナルオは時間を確認するとルナに別れの挨拶を済ませ、ユリ子と一緒に出て行った

「さっき、お父様達と何を話してたのかしら？」

「なんでもねーよ、それより…あんがとな」

「何かしら？」

「何って、泊まらしてくれてだよ」

ジャックは頬を指で掻く

「そんなのお安い御用よ、さ、勉強しましょう」

ルナはそう言ってジャックを連れて自分の部屋へと向かった

ジャックは知った

ルナが実は独りだと言つ事を、無理をしていた事を

ジャックは思う

支えてあげたいな。と

第32話 新たな予感（後書き）

新たな恋の予感！？

話は変わりますが、オリジナル小説を始めました
よかったらそちらにも、足を運んでもらえると嬉しいです！

第33話 テスト終了

「みんなテストはどうだったかしら？」

ルナは帰り道に話を持ち出す

「結構いけたよ」

スバルは満面の笑み

「私はそれなりに」

ミソラはスバル程ではないが良いらしい

「僕もそれなりにかな？」

ツカサはニコツと笑う

「俺は余裕だ」

ジャックは余裕だったらしい

「僕はバッチリです」

メガネをキラリと光らせるキザマロ

「…」

「ゴンタは？」

ビクッ

「まあまあだぜ」

慌てて取り繕う

「ホントに？」

「ほ、ホントだぜ？」

まったくゴンタときたら… 嘘をつくとすぐ目が泳ぐ

「じゃあ返却が楽しみね？」

「うぐっ…」

苦しい眩きが漏れる

「ゴンタ君、素直に白状したら？」

ミソラが助け舟を出す

「委員長！俺…、勉強したのに出来なかったんだ」

ゴンタが肩を落とす

「出来なかったってまさか…赤点！？」

ルナは予想はしていたがゴンタの白状に聊^{いさや}か焦る

「いや、どうしても数学の一問が解けなかったんだ…」

「100点取れなかった…」

6人はポカーンと口を開ける

「え？ええ？　てことはゴンタ100点目指してたの？」

スバルが我に返り、質問する

「そうだぜ？でも1問だけ解けなかったんだ」

「じゃあ、それ以外は解けたの？」

「おう、解けたぜ！」

ええー！。　6人は驚く、まさか、そんな事はないはずだ

あのゴンタが数学のテストを1問以外、全部解けただなんて

まさか…ね。

ゴンタの気のせいだろうという事にスバル達は納得する事にした

「おっとそうだ、ルナ」

ジャックはルナを呼び止める

ルナの家に住んで以来、ジャックはルナの事を委員長ではなくルナ

と呼ぶようになった

「なにかしら、ジャック」

「俺、今日から自分の家に戻るぜ。やっとねえちゃんと暁が仲直り
しらしいからな」

ジャックは笑う

「そう…、わかったわ」

ルナは一瞬、暗い顔をしたがすぐさま元気な顔を見せる

「1週間ありがとな、おじさんとおばさんにも伝えておいてくれ」

「わかったわ」

それじゃ　と言ってジャックは帰って行った

ルナは久しぶりに家へと一人で帰った

どこか寂しさを感じながら

たった一週間だったが、ジャックと過ごすのは楽しかった

勉強も^{はかど}捗ったし、なにより一人じゃく常に隣に人の暖かみを感じて
いたからだ

はあ…　ルナは溜息をする

自分の家がとても広く感じた

いや、もともと広いんだが…

心にぽっかり穴が開いたようだった

第33話 テスト終了（後書き）

さあどうなる？

感想、評価等良かったらお願いしますー

第34話 俺は…（前書き）

長いですが、区切りたくなかったので！

第34話 俺は…

ルナ達はいつも通り、スバルの家に迎えにきていた

「おはよー」

スバルとミソラが出てくる

「おはよう」

中学生になっても変わらない朝の光景

始まりは登校拒否しているスバルを、学校にこさせるためにきていたのが

いつしか、寝坊をするスバルのための迎えとなり

今となれば、すっかり自分で起きれるようになっていたが、習慣となっていた

「それじゃね」

スバルとミソラ、ツカサは5組へ、キザマロとゴンタは3組に

ルナとジャックは1組へとそれぞれ向かった

今日はテストの返却日

楽しみな子もいれば、逆に最悪な子もいるだろう

- 1組 -

「起立、きょうつけ、礼」

ルナが号令をかける

おっと、言い忘れていた事があつた

勿論、ルナは中学生になった今でも1組の委員長だ

「それでは、数学のテストを返却する

名前を呼ばれたら、取りにきてくれ」

出席番号順に呼ばれていく

テストをもらった瞬間に喜ぶ者、顔が青くなる者もいた

ジャックはニヤツと笑っている

どうやら、予想通りらしい

ルナもテストを受け取る

97点

ケアレスミスをしただけのほぼ100点に近い点数だ

ルナはドリル状の髪を手で揺らす

「最高得点は97点だ、間違った所は復習する事、それじゃ今日はここまで」

先生は空になった封筒を手にして出ていった

「ジャックどうだったかしら？」

ルナはジャックに尋ねる

「おう、見る」

ジャックは得意げにテストを見せつける

95点

「私の勝ちね！」

ルナは自分のテストを見せる

ジャックは得意教科で負けたのでショックだった

「ほ、他のテストも勝負だろ！」

負けずとジャックは他の4教科での勝負をもちかける

「いいわよ、その代わり、負けたら相手の言う事を何でも聞くのよ？」

「よし、いいだろう！」

ジャックはルナと約束を交わした

・その頃の3組・

手にテストを持って

キザマロがゴンタの元へと向かう

「ゴンタ君、どうだったんですか！」

「キザマロ…、俺…」

ゴンタは肩を落として、テストを見せる

0点

まさか…

キザマロは見間違っただのらうと一旦視線をはずしてから

再度もう一度見て見る

うーん…、これは、0点だ

「え、ご、ゴンタ君」

さすがにキザマロはゴンタに確認を取る

「はぁ…、名前書き忘れて、0点だ…」

確かに答案には ナナシのゴンベ と書かれていた

名前さえ書いていれば、そのテストは96点だったらしい

キザマロはゴンタの肩に手をポンとおいた

言葉では語らない

- 5組 -

「スバルー、どうだった!？」

ミソラは隣にいるスバルに聞く

上機嫌な所を見ると、ミソラもなかなかの出来らしい

「ん、91点だったよ」

テストを見せる

「わぁ! 凄いね!」

「ありがと、ミソラは?」

スバルはミソラにも尋ねる

「はい！」

テストを見せる

82点

「ミソラも高いじゃん！」

スバルは自分の事のように喜ぶ

「えへへ、スバルのおかげだよ！」

ミソラはスバルに抱きつく

スバルは椅子に座っていたため

抱きつかれた、いきよいに負けて椅子ごと倒れる

「わわ！」

ガタンッ！

スバルはミソラを庇って倒れたため

ミソラには怪我はなかったが、頭を打ちつけてしまった

が、いま置かれている状況に気付く

よりによってクラスで、ミソラがスバルの上に覆い被さっているのだ
男子からの嫉妬の目線、聞こえてくるヒソヒソ声

カシャツ

カメラのシャッター音まで聞こえる

「み、ミソラ！」

スバルは慌てて、上に乗っているミソラを起こす

「あはは…、ごめんね、スバル」

ミソラは制服の裾を払って謝る

「いや、別いいけど、それより…」

スバルはこのクラスの雰囲気はどうにかしたいと思った

写真まで取られたし…はあ。

スバルの胸中を察してミソラはスバルを連れて教室を出た

後に残されたクラスメイトは、スバルに対して

あいつだけ、いい思いしてる 等、思い思いに口にしていた

「うるさいよ！ 嫉妬するのもいい加減にしたら！」

低くそれでもよく透き通った声でツカサは男子に向かって言う

さっきまで陰口を言っていた男子はツカサと目を合わせると

視線をはずし、やがて何も言わなくなった

「人は人、自分は自分でしょ？君達にスバル君に対して文句を言う権利はないよね？」

女子まで黙り込んでツカサを見ていた

「あの二人は付き合ってるんだよ？そつとして置こうよ」

ツカサはそう言うのと、先程、陰口を言っていた男子の前になると

ニコツと笑って、クラスを出た

男子はやり過ぎた事を後悔し、女子はツカサに対し思いを寄せる子が増えた

それから5組だけはスバルとミソラの関係に対して

茶々はいれるが、嫉妬絡みの話は一切なくなったらしい

ツカサはそれ程までに怖かったのだろう…

- 放課後 -

「あれ？なんでジャック委員長の鞆持つてるの？」

スバルがルナの鞆まで持っているジャックを見て尋ねる

「勝負に負けたんだよ」

実に悔しそうに、ジャックは口にした

今回の成績は以下の通りだ

国語 数学 理科 社会 英語の順でいくと

スバル 88 91 95 78 75

ミソラ 80 82 90 72 83

ルナ 95 97 92 95 94

ジャック 91 95 92 91 90

ツカサ 94 83 79 86 95

キザマロ 93 96 90 90 91

そしてゴンタが… 35 0 (96) 45 52 38

結果、ルナは全教科においてジャックに勝利したのであった

ゴンタはやはり予想通りと言えば予想通りだが…数学は凄いだらう

根本的な部分でやはり馬鹿だったが…

「それじゃ、みんな、ばいばい！」

それぞれの家の方向へと別れる

ジャックは鞆持ちのため、ルナと一緒にだった

「なあ、なんでそんなに元気がねーんだ？」

ジャックはルナが明るく振舞っている事に気付いていた

「っ！」

ルナは驚いたが、立ち止まり、自分の想いを口にだした

「私…、あなたが家に居た時はとても楽しかったの

でも、あなたが元の家に戻ってしまった時に、とても…その、寂しかったのよ」

ルナは顔を伏せる

「私、もしかしたら…ジャック、あなたの事が」

ルナは意を決する

「ああ、ちょい待て」

ジャックがそれを遮る

「俺はな、ルナにいつも支えられてもらってるんだ

お前は自覚ないかもしれないけどな。

だから俺はルナの支えになりたいって思ってるんだ」

ジャックはちよつと顔を赤くしながらルナを見る

「え、それって…」

ルナまで顔が赤くなる

「まあ、なんだ、その…、俺はルナの事が好きなんだよ！」

ジャックは言い切ると目線を外して、頭だけ横を向く

「ありがとう…」

ルナは嬉しくなって涙ぐむ、ジャックはあの時と同じようにハンカチを手渡す

ハンカチを受け取り、涙を拭く

そして、ルナは精一杯の笑顔をジャックへとおくる

「お、やつといつもの顔だな」

ジャックは にしし と笑う

言葉には出さず、ルナはジャックに近寄るとキスをした

数秒後、ルナはジャックから離れると

「覚悟なさい、私は我がままなんだから！」

ルナは頬を赤く染めながらビシッと指差す

突然の事に驚いたが、ルナの宣言にジャックは笑って応えた

「はいはい」

ルナはジャックの手を握り締めて、大きく踏み出した

ジャックは やれやれ。 と思ったが手を強く握り返したのであった

第34話 俺は…（後書き）

はいつてことでジャックとルナをくつつけてみました！
ルナにも幸せになってもらいたいので！

まさかのゴンタは0点でしたね
数学だけ勉強しまくってその数学で馬鹿をしでかす展開にしてみました

感想待ってます！

第35話 喧嘩（前書き）

原作に添ったキャラクターが大分崩れつつあります
キャラクター崩壊？が今後もあると思いますが
ご理解の程よろしくお願いします

第35話 喧嘩

「スバルの馬鹿！！もう知らない！」

ミソラはそう叫ぶと部屋から出ていった

スバルはすっかり目が覚めていた

なぜこんな事になったかと言うと、それは昨日の話に遡る

「スバル、明日デートに行こう！」

ミソラはテストが終わったので、早速遊びに行こうとスバルを誘った

「明日？」

「うん！」

明日からは土日、時間はたっぷりある

「ん、いいよ」

スバルは笑顔で答える

「やった！ 私ね服見に行きたいの！」

ミソラははしゃいで、スバルの手を掴んで上下に振る

「うんうん、わかったよ」

スバルはミソラの買い物に付き合う事になった

そして今日に至る、原因と言えば…、朝のことだろう

「スバル起きて！ほら！」

ミソラは隣で寝てるスバルを揺すって起こす

普段ならば、こんな事しなくても

起きるはずなのに今日はなかなか起きなかった

「うーん…、もうちょっと…」

スバルは身を丸めて再び眠りに就こうとする

「もう！ スバル起きなさい！ 今日はデートだよ！」

ミソラはついにスバルの上に馬乗りになる

スバルの顔はしだいに苛立ちを帯びてくる

「うるさいな！眠いんだよ、もうちょっと寝かしてくれ！」

ついにスバルがキレた

上に乗ってるミソラを無理やり降ろす

ミソラは投げだされたような状態になっていた

最初は何が起こったのか飲み込めなかったが、しだいに理解していく

そして…

今に至ると言う訳だ

スバルは完全に目が冴えていた

ど、どうしよう…

いくら眠かったとは言え、言い方がまずかった

そしてなにより、ミソラは今日のデートを楽しみにしていたのだから

あんな風に言われたら、それは怒るだろう…

「ロック…」

スバルはウォーロックに助けを求める

『今回ばかりはスバル、お前が悪いな』

スバルは打開策を考えるが、何も浮かばない

『まったく…、さっさとミソラに謝ってこい』

ウォーロックはスバルを指差す

「うん…」

スバルはリビングへと降りて行った

「母さん、ミソラは…?」

ミソラの姿を探すが見当たらなかった

「ミソラなら、さっき出ていったけど…、スバル何をしかしたの？」

あかねは好奇心もあったが、ミソラが出ていった事を心配して聞く

「いや、実は…」

あかねに事情を説明する

はあ…。頭に手を当てながら、あかねは溜息をする

「さっさとミソラを追いかけて謝りなさい!」

ビシッ　とあかねに言われる

「は、はい」

思わず背筋を伸ばすほど、迫力があつた

スバルは慌てて、家を飛び出た

行き先は、展望台だ

きつと、そこにミソラは居る。となぜか確信があった

展望台にて…

「ハープ、スバルは私が思ってるほど

今日のデート楽しみにしてなかったのかな」

ミソラは手すりに身を預けながら、ハープに聞く

『そ、そんなことないわよ!』

ハープは否定する

「でもスバルは、うるさいって言って私を突き飛ばしたよ」

ミソラは悲しそうに話す

『そ、それは…』

さすがのハープも言葉がつまる

「私、スバルに嫌われたらどうしよう…、スバルがいなくなったら

独りなっちゃうよ……」

ミソラは堪えていたが、ついに涙が零れてきた

『ミソラ、スバル君はそんな子じゃないわ!』

「でも、でもぉ……」

ミソラはその場にペタリと座りこむ、涙はどんどん溢れてくる
拭いても、拭いても涙は止まらない

「ミソラっ」

見つけた!

スバルは肩で息をしながら、ミソラの元へと走る

ミソラは泣いている

スバルはミソラを包み込むように抱きしめる

「ミソラ、ごめんね」

スバルはミソラを強く抱きしめながら耳元で謝る

「僕だって楽しみにしてたのに、うるさいって言って突き飛ばしたりして」

ミソラを傷つけた…、でも僕はミソラの事が好きなんだ
ずっと一緒に居たいんだよ」

スバルはミソラの涙を指で拭く

ミソラは今一番聞きたかった事が聞けた

「グス…、スバル、ホントに一緒に居てくれる？」

「絶対！」

「ずっとずっと一緒に居てくれる？」

「うん、ずっとずっと一緒に居る！」

スバルを赤く腫れた目で見つめる

そして、ミソラはスバルにキスをした

名残惜しそうに離れるとミソラは再び抱きついた

「ミソラ、これからデートに行かない？」

スバルは自分の腕の中にいるミソラに聞く

「行かない」

え？ スバルはミソラの返答にとまどう

「今日はずっとこうしていたいもん！」

『だだよ、スバル！』

ウォーロックが出てくる

『スバル君、今日は一日ミソラの言う事聞いてあげてね！』
ハープまで出てくる

「わかったよ」

スバルは了承した

これくらい御安い御用だ

「ミソラ、それならベンチに座ろつよ」

スバルが立って、ミソラの手を引こうとするが

ミソラは動かない

「ミソラ？」

「あはは…、立てないや」

ミソラはすっかり気が抜けて、立てなくなっていた

スバルは笑うと、ミソラの横で肩膝をついて

腰の下に手を潜らせる

よっと！ スバルはミソラをお姫様抱っこする

「え、ええ！？ す、スバル／＼」

ミソラはさすがに恥ずかしかった

お姫様抱っこしてミソラをベンチへと降ろす

それから二人は手を繋いで、色々な話をした

「あ！スバルさ、私と結婚してくれるんでしょう？」

先程の事を思い出し、ミソラは嬉しそうに聞く

スバルは顔を真っ赤にしながら答える

「うん、ミソラが嫌じゃないなら結婚したい」

「えへへ、絶対だよ！」

ミソラは幸せそうな顔でスバルに身を預ける

スバルはミソラの肩に手を回すのであった

第35話 喧嘩（後書き）

まだこれは一日の前半です
後半が待ってますよ、後半が！

第36話 ミソラのお願

「そろそろ帰らない？」

スバルはミソラに聞く

かれこれ2時間近くスバルはミソラとベンチに座っていた

ミソラはスバルの肩に頭をのせているので、幸せの真っ只中だろう

「ん、それじゃ帰ろっか」

ミソラはベンチから立って、スバルの手を引く

スバルは手を引かれたままに立つ

「あれ？ そえばスバル、身長伸びたね！」

ミソラはスバルの真正面にたつ

少し前まで、同じ目線ぐらいで話していたはずが

今ではスバルを少し見上げている

「え、そっ？」

スバルは自分の頭に手をやる

「うん、高くなってるよ！」

ミソラは ほらっと言って自分の頭の上からスバルに向かって

水平に手を動かして比べてみる

前に比べた時よりも幅が広がっていた

「ホントだ！」

スバルは喜んだ

どんどん男らしくなってくなあとミソラは思った

二人は手を繋いで家へと帰った

「「ただいまー」」

「おかえり、ちゃんと二人で帰ってきたわね」

あかねは心配はしていたが、だいじょぶだろうという確信があった

確信は当り、二人はずっと仲良くなって帰ってきた

若いっていいわね、なんてあかねは思っていた

「二人ともご飯はどうするの？」

「「食べるー！」」

二人は朝から何も食べていなかった

あかねはニコツと笑うとキッチンへと向かった

朝ごはんを二人で仲良く食べた

「お母さん、聞いて聞いて！」

ミソラはとても嬉しそうな顔をしながら、あかねの元に行く

勿論、スバルを引き連れて

「スバルね、私と結婚してくれるんだって！」

ミソラは満面の笑みだったが、スバルは赤面している

「あら！ そうなの、スバル？」

あかねも楽しそうに聞く

「うん、ミソラが嫌じゃないなら結婚したいな」

耳まで赤くしてスバルは答える

「えへへ」

ミソラはスバルに抱きつく

あかねはニヤニヤしながら

「良かったわね、ミソラ！ スバルの事よろしくね」

「うん！」

二人は笑っていたが、スバルだけは真っ赤だったという

それからずっとミソラはスバルに抱き着いていた

スバルはハーブに言われた通り

ミソラのいう事を何でも聞いた

でもミソラは、じゃ、抱き着いていたい と言っただけだったので

結果的に夜までスバルはミソラに抱きつかれていた

「スバルかミソラ、お風呂に入りなさい」

あかねはリビングでくっついて二人に言う

「はい、ミソラ先に入る？」

「ヤダ」

「え？なら僕が先に入るよ？」

「ヤダ」

「…ヤダってどうするのさ」

スバルは戸惑う

「スバル、一緒に入ろう？」

ミソラは恥ずかしがりながら言う

え スバルは固まる

今、何て言った？ え？一緒に入ろう？ いやいやいや…

ミソラの言葉が頭の中でグルグル回る

「スバル？」

固まっているスバルをミソラが呼んで現実に戻す

「っは、いやいやいや、ダメでしょ！」

スバルは赤くなりながら言う

「私はいいよ？ スバルになら」

ミソラは頬を赤くしながら首を少し傾げて見つめてくる

ドクンッ

心臓が高鳴る

やば過ぎる状況だった

「っ！ こ、このお願いだけは無理！」

スバルは理性を働かして踏みとどまる

「ふふ、冗談だよ！ 先にお風呂入って来るね」

ミソラは笑って、風呂場へと向かった

危機は脱したが、かなり危なかったスバルだった

その後、スバルも風呂へと入り、寝る事にした

「スバル、今日はさ、抱き締めて寝てよ」

ミソラは布団の中でスバルにお願いする

スバルは仰向けの位置からミソラの方を向き

ミソラに手を回して抱きしめる

「これでいい？」

「うん！」

ミソラはスバルと向き合った状態でスバルに抱きしめてもらっていた

えへへ、嬉しいな。ミソラは思わず笑みが零れてしまう程、嬉しかった

彼の鼓動を、温もりを直に感じてられるのだから

ミソラは幸せを感じつつ、眠りについた

第36話 ミソラのお願（後書き）

感想等待着てます！

第37話 夏といえば…（前書き）

長らく投稿ができませんでした、遅れた事をお詫びします

また感想を返信できていない分につきましても

この場を借りてお礼を申し上げます

応援してくれてありがとうございます！

第37話 夏といえば…

「スバル、早く早く！」

ミソラのソプラノボイスが急かしつける

「うんうん、わかったよ」

スバルは荷物を手に持ち部屋を出た

「さ、いこっか！」

スバルはミソラに手を差し伸べる

「うん！」

差し出された手を握る

「二人とも気を付けて行くのよ？」

あかねは、ふふつと笑う

「大丈夫だよ、それじゃ行つて来るね」

「楽しんできなさい」

「行つてきまーす」

二人は照りつける太陽の下、家を出た

「ふふ、ホントに仲良しね」

あかねは二人の背中を見ながら、呟いた

コダマ中学校も前期中間テストが終わり

長い夏休みを迎えていた

スバルとミソラは夏休みが始まって早々に旅行に出かける計画を立てていた

何分忙しいミソラが唯一まとまって休みが取れたのが夏休みが始まる直後だったので

こういう事になったのだった

行き先はベノサイドシティに新しくできた【ウォーターパーク】

なんでも日本一長いウォーターライダーが目玉らしい

旅行期間は2泊3日だが

泊まるのはミソラの家という事になっていた

「うわー… 大きいねえ」

目の前には異様に高くて長い滑り台が見える

ミソラは思わず見上げていた

「すごい大きいね、うん」

スバルもミソラと共に思わず見上げてしまった

「さすが日本一だね、早く滑りに行こうか！」

スバルはミソラの手を引いてパーク内へと向かった

夏休みに入ったばかりだというのに人は多かった

パーク内へ入るためのチケットを買うための列の最後尾は2時間待ちと書かれている

スバルは予めコネで特別券を発行してもらったという

裏技を使用していたため、なんなく入れたのだが

他のお客さんに悪いなあと少なからず感じていたのは言うまでもない

パーク内は真ん中に大きな流れるプール

そして、そのプールを囲うように大きなとぐろを巻いた

ウォータースライダー

足場は南国をイメージした白い砂が敷かれていた

所々にパラソルとイスが用意されていた

「それじゃ着替えてこようか。着替え終わったらここに集合ね」

「わかった！」

ミソラはニコツと笑うと更衣室へと向かった

スバルは青い色の海パン、それに変装用のサングラス姿で出てきた

地味に引き締まった肉体で、なにげなく腹筋が割れていたりする

中学生となりそれなりに身長が伸びたため、傍から見ると

それなりにカッコいい分類の男子に入るため

周りの女子がキャーキャー騒いでたりするのだが

スバルが自覚しているはずもなく

（なんか周りがうるさいけど、なんかあったのかな？）

なんて思っているのであった

「よし！」

ミソラは着替えを済ませ、更衣室を出てきた

小花柄のスカートの水着で

白い肌に見事なまでに似合った水着姿だった

サングラスと麦藁帽子を被ったその姿は

可憐としかいいようのない姿だった

（スバル褒めてくれるかな？）

ニコニコしながらスバルの姿を探す

あ、いた！

ん？ ……なんであんなにキヤーキヤー言われてるのかな？

確かにカッコいいけどさ！ まったく！

ミソラは複雑な心境だったが、スバルの元へと駆けて行った

「スバルー」

スバルは呼ばれた方を向く

目に映るのは固まってしまう程、綺麗なミソラがいた

同じ女性であっても思わず振り向いてしまうような可愛さだった

（か、可愛すぎでしょ、これは…）

「えへへ、似合うかな？」

ミソラはその場でくるりと回ってみせる

うわー… 周りからも声が漏れる

いつの間にか集まっていた視線

「ミソラ、すっごい似合ってるよ！」

「ホント！？」

スバルに詰め寄る

「ホントだよ！ うん、すっごい可愛いよ」

スバルは、ほんのり顔を赤めながら答える

「えへへ、よかった！」

ニコツと満面の笑みを見せる

（可愛いなあ）

見惚れてしまう程の笑顔だった

「さ、いこっか！」

スバルはミソラに手を差し出す

所がミソラは手ではなく、腕に腕を絡めてきた

「ミ、ミソラ／＼」

スバルは顔が赤くなる

「いいでしょ！」

スバルはミソラに引つ張られながらプールへと向かうのであった

第37話 夏といえば…（後書き）

久しぶりの投稿のため、変な部分もあるかもしれませんが
よかったです感想お願いします！

第38話 水遊び

照りつける太陽の陽光を水が反射し

水飛沫がキラキラと光り輝いていた

ミソラは浮き輪でプールの水の流れに身を任せていた

スバルはミソラの直ぐ脇を泳ぐ

「気持ちいいね」

ミソラは太陽の光から目を庇う様に手のひらを掲げ、笑いかける

スバルは言葉に言いようのできない可愛さにドギマギしながらも応える

「うん、気持ちいいね」

流石に水の中ではサングラスも帽子もつけれないので

徐々にはあるが、視線が集まっていた

お忍びできている旅行を邪魔されるのも、あれなので

ミソラはスバルの手を引いて

ウォーターライダーへと向かった

ウォーターライダーは

マテリアルウェーブで形成された、透明な筒状となっており

中には水が流れていた

日本一長いと言っただけあって、高さもそれなりにある

なんせ階段ではなく、エレベーターでの移動なのだから

スバルとミソラはエレベーターへと乗り込む

「あ！ そえば、スバルって絶叫系苦手だったよね？」

「う、うん」

「ここのウォーターライダー結構スピード出るらしいけど、大丈夫かな？」

ミソラはちよつと意地の悪そうな顔を作る

「多分平気だと思うけど……」

引き攣った笑みを作る

「なら平気だね！」

ミソラは陽気に係員の元へと歩き出す

はぁ… 覚悟を決めよう…

スバルはため息をつき、ミソラの後を追った

「お一人様ですか？」

係員のお兄さんが訪ねる

「あ、二人です」

ミソラは振り返ってスバルを見る

「お二人様ですね。それでは女性の方が前で男性の方が後ろで腕を十字に組んで肩を掴んで下さい」

係員のお兄さんはテキパキと要点を伝える

入り口でスバルとミソラは腕を組む

「では、いつてらっしゃいませ」

係員のお兄さんはニコツと笑うとスバルの背中を押した

「「キヤー（うわー）」「」

ジェットコースター程ではないが

筒状になっているためカーブ等で

螺旋を描くように滑る

目まぐるしく景色が回る

ざっぶん！

出口からスバルとミソラが飛び出される

ぷはっ

水中から顔出す二人

目が合うと二人は笑いあった

「おもしろーい！ スバルもう一回行こう！」

ミソラは楽しそうに笑いながら

スバルの手を引っ張る

「わかったよ」

スバルは苦笑しながら、手を引かれていく

「早く早く！」

ミソラに急かされエレベーターへと再度向かった

その後合計6回乗り

文字通りクタクタになったのは言うまでもない

日はすっかり傾き

プールの水面を茜色に染める

プールの中で水を掛け合っているカップルの水飛沫はとても綺麗だった

スバルとミソラはパーク内で昼食兼夕食を取って

パークを後にした

第39話 久しぶりの家（前書き）

大変長い間更新をストップしておりました。

みなさま申し訳ありません。

久方ぶりにログインすると多くの感想が寄せられており、正直驚いております。

この場をかりてお礼を申し上げます。

新生活も安定してきたので亀更新ではありますが、更新をしていきたいと思っています。

第39話 久しぶりの家

「ただいまー」

誰も居ない家にソプラノボイスが響く、続けて「お邪魔します」と声が続いた。

「うわー、久しぶりだな」

ミソラは久しぶりの我が家を見直す。

長年一人で暮らしていた家。

母を亡くしてからは、仕事、仕事の日々だった。

そんな毎日に嫌気がさして、彼に出会ったのだ。

自分の運命の人に。

彼に出会ってから、毎日寝る前に彼の事を思い出して、眠りについた。

そう思うだけで胸が熱くなって、嬉しくて、世界が色づいていった。

本当に彼に 星河スバルに出会えてよかった。

ミソラは胸に湧いたこの想いを言葉にした。

「ママ、私、今とても幸せだよ。毎日が楽しいよ」

だから…心配しないで、私にはスバルがいます」

ミソラは笑った。

幸せそうな顔に混ざった、少しの悲しみをスバルは見逃さなかった。

スバルはミソラを抱き寄せる。

「初めまして、星河スバルです。

こんな僕ですが、ミソラとずっと歩んでいこうと思います。

見守っていてください」

ミソラはスバルの言葉を聞き、嬉しそうに笑いながらスバルの胸に頭を預けた。

「約束だよ、スバル」

「うん、約束するよ。それにミソラには、僕だけじゃなくて、父さんや母さん

ハープにロック、それに委員長達だって居るんだよ

絶対独りじゃないんだからね？

むしろもう独りにはなれないよ」

スバルはニコツと笑った。

ミソラは目に溜まった涙を指で擦り、赤くなった目で精一杯の笑顔を見せた。

「うん、私はもう独りじゃない」

ミソラはスバルに抱きつき、スバルもまたミソラを抱きしめた。

外はすっかり暗くなっていた。

その暗闇の中を一際大きな星が2人を祝福するかのようにキラリキラリと輝いていた。

第39話 久しぶりの家（後書き）

久しぶりの執筆です、ぶっちゃけ文章が変わっている気がします…
久方ぶりの更新をした作者に感想をお待ちしております><

第40話 大切な場所（前書き）

更新が遅いですね…
申し訳ないです

第40話 大切な場所

「スバル、もう寝る？」

ミソラは着替えを済ませたらしく、見慣れたピンクのパジャマを着ていた。

「あ、うん、そろそろ寝よっか」

スバルは時間を確認すると、椅子から立ち上がりミソラに続いた。

「ママと使ってたベットで寝ようね」

ミソラは嬉しそうに笑う。

「僕はミソラと一緒にならどこでも大丈夫だけど、その…いいの？」

スバルは部屋の前で立ち止まりミソラに問う。

「え、いいのって何が？」

ミソラはキョトンとした顔で聞き返す。

「ここはミソラとミソラのお母さんの大切な場所じゃないのかなって思ってたさ」

スバルは部屋に置かれた大きなベットを見る。

綺麗に整頓された部屋で、白を基調としたデザインのベット。

ベットのサイドに置いてあるサイドテーブルにはお母さんの写真と睡蓮が飾ってある。

「ここは確かにママとの大切な場所だよ、でもねスバルにも大切な場所にして貰いたいの」

ミソラはそう言う部屋に入り、サイドテーブルに飾ってあった写真を手に取り

思い出に浸るかのように目を細める。

「あのね、この睡蓮はママが大好きな花だったの

花言葉で『純粹な心』とか『信賴』って意味があるんだって

だからママはこの花を大切にしている私も私に正直でいなさいって

そして信じられる人ができたならその人を一生信じなさいって

だから私はスバルをここまで信じてる

この気持ちは変わらないよ」

ミソラはどこか誇らしげに笑う。

その笑顔は睡蓮と相まってかとても綺麗だった。

「ありがとう、ミソラ。いつも僕を信じてくれて、僕もミソラを信じてるよ」

スバルはへへつと笑いながら紅くなった頬をかく。

「うん、さ、寝よう？スバル」

ミソラはスバルを招くように手を差し出す。

「うん、そうだね。……ありがとうミソラ」

ミソラの大切な場所に隣に居ることを許してくれて」

スバルはミソラの手を取り、近づいた時にそうつと囁いた。

ミソラは紅くなってから

「／／／／／。スバルじゃないと嫌だもん」

そうスバルに聞こえるか聞こえないかの声で零した。

「ん？何か言った？ミソラ」

ベットに入ったスバルはミソラの方を向いて首を傾げる。

「ん、なんでもないよっ　おやすみスバル！」

ミソラはスバルの胸に顔を埋め、意識を手放した。

スバルもまた、ミソラの髪を手で梳き、満たされる充実感と共に眠りに落ちた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7792o/>

流星のロックマン ～共に歩む道～

2011年7月21日18時08分発行